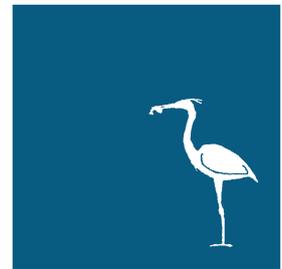


浦幌町立博物館
紀要

第21号



『浦幌町郷土博物館報告』創刊号～第45号
 (1972～1996) 継続

BULLETIN OF THE HISTORICAL MUSEUM OF URAHORO

目 次

荒川和子：浦幌町立博物館所蔵の2020年度採集の蝶標本	1
須摩靖彦：大樹町当縁湿原と海岸のトビムシ	9
後藤秀彦：生剛村第二岐阜殖民合資会社岐阜農場、農場主大野亀三郎、 管理人下野松太郎に関するメモ	17
〔採集記録・観察記録〕	
円子紳一：オオモンシロチョウが再発生	33
円子紳一：浦幌のウチダザリガニ駆除（2020年）	35
円子紳一：アサギマダラを確認	36
〔資料紹介〕	
三浦直春・大和田努 解説：大正十五年・昭和元年 教育雑件 浦幌村役場（その6）	38

2021

3

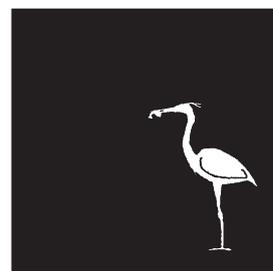
北海道
 浦幌町立博物館

浦幌町立博物館

紀要

第21号

『浦幌町郷土博物館報告』創刊号～第45号
(1972～1996) 継続



BULLETIN OF THE HISTORICAL MUSEUM OF URAHORO

2021

3

北海道
浦幌町立博物館

浦幌町立博物館所蔵の2020年度採集の蝶標本

荒川和子¹⁾

Kazuko ARAKAWA, 2021. Butterfly 2020 collection of The Historical Museum of Urahoro

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 21: 1-8

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
アゲハチョウ科 Papilionidae						
ミヤマカラスアゲハ <i>Papilio maackii</i> MÉNÉTRIÈS, 1858						
1647	2021- 27	1	109	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 8. 13	荒川和子
1648	2021- 28	5	110~120	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 8. 16	干場月菜
キアゲハ <i>Papilio machaon</i> LINNAEUS, 1758						
1649	2021- 29	1		北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 8. 13	荒川和子
シロチョウ科 Pieridae						
モンシロチョウ <i>Pieris rapae</i> (LINNAEUS, 1758)						
1650	2021- 1	3	43~49	北海道十勝郡浦幌町相川	2020. 7. 29	荒川和子
1651	2021- 2	1	50	北海道十勝郡浦幌町相川	2020. 8. 7	荒川和子
1652	2021- 3	1	48	北海道十勝郡浦幌町相川	2020. 9. 9	荒川和子
オオモンシロチョウ (♀) <i>Pieris brassicae</i> (LINNAEUS, 1758)						
1653	2021- 4	1	60	北海道十勝郡浦幌町相川	2020. 7. 29	荒川和子
1654	2021- 5	1	56	北海道十勝郡浦幌町相川	2020. 8. 7	荒川和子
1655	2021- 6	1	62	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 8. 13	荒川和子
1656	2021- 7	2	53~59	北海道十勝郡浦幌町相川	2020. 9. 9	荒川和子
オオモンシロチョウ (♂) <i>Pieris brassicae</i> (LINNAEUS, 1758)						
1657	2021- 8	1	47	北海道十勝郡浦幌町相川	2020. 9. 21	荒川和子
モンキチョウ <i>Colias erate</i> (ESPER, 1805)						
1658	2021- 9	1	62	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 5. 15	荒川和子
エゾシロチョウ <i>Apoeia crataegi</i> (LINNAEUS, 1758)						
1659	2021- 10	1	66	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 10	荒川和子
1660	2021- 11	1	70	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 7. 2	荒川和子
1661	2021- 12	1	67	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 7. 11	荒川和子
エゾスジグロシロチョウ <i>Pieris dulcinea</i> (BUTLER, 1882)						
1662	2021- 13	6	35~43	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 5. 8	荒川和子
1663	2021- 14	1	40	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 5. 9	荒川和子
1664	2021- 15	1	42	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 5. 15	荒川和子
1665	2021- 16	2	42	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 5. 31	荒川和子
1666	2021- 17	1	51	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 7. 9	荒川和子
1667	2021- 18	3	43~45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 14	荒川和子
1668	2021- 19	1	53	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 7. 14	荒川和子
1669	2021- 20	1	48	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 7. 14	荒川和子
1670	2021- 21	1	48	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 20	荒川和子
1671	2021- 22	1	48	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 8. 13	佐藤 蓮
スジグロシロチョウ <i>Pieris melete</i> (MÉNÉTRIÈS, 1857)						
1672	2021- 23	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 5. 31	荒川和子

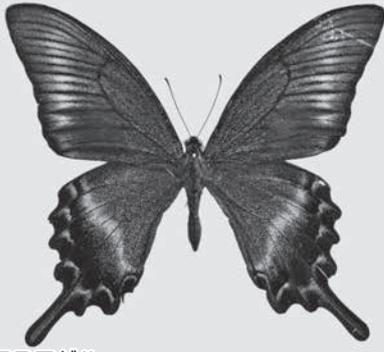
1) 〒089-5617 北海道十勝郡浦幌町字南町

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
1673	2021- 24	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 6	荒川和子
1674	2021- 25	1	41	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 7. 9	荒川和子
1675	2021- 26	2	53~54	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 8. 1	荒川和子
セセリチョウ科 Hesperidae						
コキマダラセセリ <i>Ochlodes venatua</i> (BREMER & GREY, 1852)						
1676	2021- 30	2	29~30	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 20	荒川和子
1677	2021- 31	1	30	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 7. 30	荒川和子
オオチャバネセセリ <i>Polytremis pellucida</i> (MURRAY, 1875)						
1678	2021- 32	2	33~35	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 20	荒川和子
1679	2021- 33	1	32	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 21	荒川和子
1680	2021- 34	1	39	北海道十勝郡浦幌町万年	2020. 7. 28	荒川和子
1681	2021- 35	1	32	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 8. 4	荒川和子
1682	2021- 36	1	35	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 8. 12	荒川和子
タテハチョウ科 Nymphalidae						
ギンボシヒョウモン <i>Speyeria aglaja</i> (LINNAEUS, 1758)						
1683	2021- 41	1	60	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 7. 30	荒川和子
ウラギンスジヒョウモン <i>Argyrome laodice</i> (PALLAS, 1771)						
1684	2021- 42	1	53	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 7. 30	荒川和子
1685	2021- 43	2	50~53	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 8. 12	荒川和子
ミドリヒョウモン <i>Argynnis paphia</i> (LINNAEUS, 1758)						
1686	2021- 44	1	63	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 8. 1	荒川和子
1687	2021- 45	1	60	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 8. 20	荒川和子
1688	2021- 46	2	54~61	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 8. 20	荒川和子
シータテハ <i>Polygonia c-album</i> (LINNAEUS, 1758)						
1689	2021- 39	1	54	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 1	荒川和子
1690	2021- 40	1	55	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 9. 21	荒川和子
アカタテハ <i>Vanessa indica</i> (HERBST, 1794)						
1691	2021- 37	1	61	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 8. 14	荒川和子
ヒメアカタテハ <i>Vanessa cardui</i> (LINNAEUS, 1758)						
1692	2021- 38	1	47	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 9. 30	荒川和子
アカマダラ <i>Araschnia levana</i> (LINNAEUS, 1758)						
1693	2021- 47	1	29	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 5. 31	荒川和子
1694	2021- 48	3	27~32	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 4	荒川和子
1695	2021- 49	1	36	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2020. 8. 17	荒川和子
アカマダラ(斑紋異常型) <i>Araschnia levana</i> (LINNAEUS, 1758)						
1696	2021- 90	1	34	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2020. 8. 17	荒川和子
サカハチチョウ <i>Araschnia burejana</i> BREMER, 1861						
1697	2021- 50	1	37	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 10	荒川和子
1698	2021- 51	1	36	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 8. 4	荒川和子
フタスジチョウ <i>Meptis rivularis</i> (SCOPOLI, 1763)						
1699	2021- 52	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 17	荒川和子
1700	2021- 53	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 7	荒川和子
1701	2021- 54	1	45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 20	荒川和子
1702	2021- 55	1	47	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 8. 4	荒川和子
イチモンジチョウ <i>Ladoga camilla</i> (LINNAEUS, 1764)						
1703	2021- 56	2	44~45	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 9	荒川和子
クジャクチョウ <i>Inachis io</i> (LINNAEUS, 1758)						
1704	2021- 57	1	52	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 5. 9	荒川和子
1705	2021- 58	1	51	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 10. 6	荒川和子
1706	2021- 59	1	48	北海道十勝郡浦幌町南町	2020. 10. 9	荒川和子

整理番号	受入番号	点数	計測値	採集地	採集年月日	採集者
サトキマダラヒカゲ <i>Neope goshkevitschii</i> (MENETRIES, 1857)						
1707	2021- 60	1	59	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 14	荒川和子
オオヒカゲ <i>Ninguta schrenckii</i> (MÉNÉTRIÈS, 1858)						
1708	2021- 61	1	72	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 8. 4	荒川和子
クロヒカゲ <i>Lethe diana</i> (BUTLER, 1866)						
1709	2021- 62	1	42	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 17	荒川和子
1710	2021- 63	1	47	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 20	荒川和子
1711	2021- 64	1	42	北海道十勝郡浦幌町平和塔	2020. 7. 20	荒川和子
1712	2021- 65	1	41	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 7. 30	荒川和子
シロオビヒメヒカゲ <i>Coenonympha diana</i> (BUTLER, 1866)						
1713	2021- 71	1	31	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 6. 4	荒川和子
1714	2021- 72	1	30	北海道十勝郡浦幌町万年	2020. 6. 4	荒川和子
1715	2021- 73	2	30~31	北海道十勝郡浦幌町万年	2020. 6. 10	荒川和子
1716	2021- 74	1	32	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 10	荒川和子
ヒメウラナミジャノメ <i>Ypthima argus</i> BUTLER, 1866						
1717	2021- 75	1	計測不能	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 7. 9	荒川和子
ウラジャノメ <i>Lopinga achine</i> (SCOPOLI, 1763)						
1718	2021- 76	1	46	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 14	荒川和子
1719	2021- 77	1	47	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 20	荒川和子
ジャノメチョウ <i>Minois dryas</i> (SCOPOLI, 1763)						
1720	2021- 66	1	53	北海道十勝郡浦幌町万年	2020. 7. 20	荒川和子
1721	2021- 67	1	51	北海道十勝郡浦幌町万年	2020. 7. 28	荒川和子
1722	2021- 68	1	50	北海道十勝郡浦幌町万年	2020. 7. 30	荒川和子
1723	2021- 69	1	57	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 8. 4	荒川和子
1724	2021- 70	1	56	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 8. 20	荒川和子
シジミチョウ科 Lycaenidae						
カラスシジミ <i>Neozephyrus japonicus</i> (MURRAY, 1875)						
1725	2021- 88	1	30	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 7. 9	荒川和子
ツバメシジミ <i>Everes argiades</i> (PALLAS, 1771)						
1726	2021- 78	2	23~25	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 5. 31	荒川和子
1727	2021- 79	2	22~23	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 4	荒川和子
1728	2021- 80	1	25	北海道十勝郡浦幌町常豊信号所	2020. 6. 6	荒川和子
1729	2021- 81	1	23	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 6	荒川和子
1730	2021- 82	1	22	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 10	荒川和子
1731	2021- 83	1	24	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 7. 30	荒川和子
ベニシジミ <i>Lycaena phlaeas</i> (LINNAEUS, 1761)						
1732	2021- 87	2	22~23	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 6. 10	荒川和子
ヒメシジミ <i>Plebejus argus</i> (LINNAEUS, 1758)						
1733	2021- 86	1	26	北海道十勝郡浦幌町東山	2020. 7. 30	荒川和子
ルリシジミ <i>Celastrina argiolus</i> (LINNAEUS, 1758)						
1734	2021- 84	2	25~26	北海道十勝郡浦幌町森林公園	2020. 5. 15	荒川和子
1735	2021- 85	1	26	北海道十勝郡浦幌町万年	2020. 7. 28	荒川和子
ゴマシジミ <i>Maculinea teleius</i> (BERGSTRÄSSER, 1779)						
1736	2021- 89	1	40	北海道十勝郡浦幌町万年	2020. 7. 20	荒川和子

参 考 文 献

- 志村 隆. 2007. 日本産蝶類標準図鑑. 336pp. 学習研究社, 東京.
 堀 繁久・桜井正俊. 2015. 昆虫図鑑北海道の蝶と蛾. 422pp. 北海道新聞社, 札幌.
 永盛俊行・永盛拓行・芝田 翼・黒田 哲・石黒 誠. 2018. 完本 北海道蝶類図鑑. 396pp.
 北海道大学出版会, 札幌.



ミヤマカラスアゲハ



キアゲハ



モンシロチョウ



オオモンシロチョウ (♀)



オオモンシロチョウ (♂)



モンキチョウ



エゾシロチョウ



エゾスジグロシロチョウ



スジグロシロチョウ



コキマダラセセリ



オオチャバネセセリ



ギンボシヒョウモン



ウラギンスジヒョウモン



ミドリヒョウモン



シータテハ



ヒメアカタテハ



アカタテハ



サカハチチョウ



アカマダラ (表)



アカマダラ (裏)



アカマダラ (斑紋異常型) 表



アカマダラ (斑紋異常型) 裏



フタスジチョウ



イチモンジチョウ





カラスシジミ



ツバメシジミ



ヘニシジミ



ヒメシジミ



ルリシジミ



ゴマシジミ

大樹町当縁湿原と海岸のトビムシ

須摩靖彦¹⁾

Yasuhiko SUMA, 2021. *Collembola* fauna of Toberi-wetland and sand dune, Taiki-cho, Hokkaido

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro. 21: 9-15.

はじめに

十勝地方のトビムシ調査については、これまで菱や筆者らにより調べられ、13科96種が報告されている (Hishi, *et al*, 2012; Uchida & Suma, 1973; 須摩, 1984, 1994, 1995, 2020; 須摩・山崎, 2013)。今回は大樹町当縁(とうべり)湿原と隣接する当縁海岸草原の土壤動物調査により12科27種 (sp. cf. 幼虫を含む) 909個体のトビムシ類が抽出されたので報告する。また、その中から十勝地方未記録種2科2種が得られたので、それも合わせて報告する。

大樹町当縁湿原は、「十勝海岸湖沼群」と総称される十勝川河口から広尾町までの太平洋沿岸に連なる湿原と淡水、汽水湖沼の中の湿地の一つである (図1)。十勝地方に残された湿地生態系として、環境省の「日本の重要湿地500」に選定され、北海道自然環境保全指針においては「保全を図るべき自然地域(すぐれた自然地域)」に指定されている。特に、当縁湿原は低

層湿原の実態と、ミズゴケ属やホロムイソゲ、ワタスゲ等高層湿原の植生が確認され基礎調査が始まったところである (新庄, 2020)。また、湿原と隣接する当縁海岸にはハマナスの他、ガンコウランなど高山帯植物群落形成がみられ、太平洋沿岸部の特徴的な植生環境がのこされたところである (図2)。

一方、十勝海岸湖沼群への産業開発の波は大きくうねり、当縁湿原も例外でない。特に、大樹町の「宇宙のまちづくり」から、今は「北海道スペースポート(宇宙港)」の基本構想へと進み、現在当縁地区は宇宙ロケット発射が繰り返し行われているところである。今後周辺の晩生・ホロカヤントーを含め大規模な宇宙基地開発へと進みつつあるところで、現在この地は開発か保護かのせめぎあいの最前線である。今回この渦中の調査報告となった。

なお、この調査は大西 純氏が当地に赴き土壤動物調査を実施したもので、その際に抽出された土壤動物からトビムシ類の提供を受けたものである。



図1 十勝海岸湖沼群と当縁湿原



図2 調査地点 (①~③) (地図1・2: 国土地理院地図使用)

1) 〒085-0813 釧路市春採6丁目7-32

調査地の概要と方法

当縁湿原はヨシ、ツルヨシやイワノガリヤスなどイネ科植物が優占する低層湿原とミズゴケ属（オオミズゴケ、クシノハミズゴケやワラミズゴケ）やホロムイソゲ、ワタソゲ等高層湿原と、一方当縁海岸の植生はカシワ・ササ群落、ハマナス・ササ、コハマギク群落やガンコウランなどの高山帯群落形成している（矢部、2016）。

これら異なる2つの環境から3個の土壌サンプル（湿原2個、海岸植生1個）を採取した。以下その個々の土壌サンプルの概況である。

土壌サンプル①、②：当縁湿原の主にミズゴケ・スゲなど、採取日は2017年9月17日、標高約2m、湿原の縁から約10m奥に入った所である（図2の番号①、②）（写真1）。

土壌サンプル③：当縁海岸、崖から約15mのガンコウラン群落の周囲、採取日は2017年11月11日、標高約10m、（図2の番号③）（写真2）。



写真1 当縁湿原（ミズゴケ・スゲなど）（撮影：大西 純氏）

土壌サンプルは無定量で、約10cm³・深さ約5cmで、約1リットルを紙袋（12×7×22cm）に入れ持ち帰った。直ちにツルグレン装置（ロートの直径15cm、40w白熱電球、網目2mmの金網2枚）にかけ、土壌動物を抽出した。抽出時間は2～3日を要し、完全にサンプルを乾燥させた。抽出された土壌動物は100%イソプロパノールで固定保存し、その液浸から実体顕微鏡（オリンパスSZ）でトビムシだけを選び、封入剤としてホイヤー液を使い1～7枚のトビムシ類集合プレパラートを作製した。プレパラートは10枚（プレパラートNo.は6082～6088、6093、6134～6135）である。そのプレパラートは現在筆者が保管している。プレパラートの乾燥後、生物顕微鏡（オリンパスBH-2）でトビムシを同定し、合わせて全トビムシ個体数の算定をした。

なお、トビムシの分類体系や同定は、『日本産土壌動物 - 分類のための図解検索 - (第二版)』（青木編著、2015）と、『日本昆虫目録 第1巻 無翅昆虫各目』（町田編著、2020）に従った。



写真2 当縁海岸（ガンコウランなど）（撮影：大西 純氏）

結果と考察

今回は大樹町当縁湿原2個と当縁海岸草原1個の、合計3個の土壌サンプルから12科27種（sp. cf. 幼虫を含む）909個体のトビムシ類が抽出された。その内、同定出来たのは9科18種（66.7%）、687個体（75.6%）であった。その他はsp.（科・属の未知種）cf.（酷似しているが疑わしい種）である。それらから、3点に分け考察する。巻末には全トビムシとその個体数を土壌サンプル別に掲載した（別表）。

1) 当縁湿原と当縁海岸のトビムシ種構成の特徴

湿原の2個の土壌サンプルから、11科23種791個体が抽出された。種構成はツチトビムシ科のハイイロツチトビムシが1番多く、192個体（24.3%）である（図3）。2番目はシロトビムシ科のニッポンシロトビムシ105個体（13.3%）、3番目は同科ヒサゴトビムシ104個体（13.1%）、この3種で全体の半分を占めた。あと、ツチトビムシ科のヤマトメナシツチトビムシ94個体（11.9%）、同科ベソッカキトビムシ82個体（10.4%）、同科ツチトビムシ亜科の一種76個体（9.6%）、ヒメ

マルトビムシ科のヒメマルトビムシ属の一種60個体(7.6%)の順で、これら7種が当縁湿原の優占種で、湿原サンプル全体の9割を占めた。

一方、海岸草原の1個の土壤サンプルは、5科8種118個体と湿原サンプルと比べて種・個体数が少なかった。1番多いのはムラサキトビムシ科のフクロムラサキトビムシ属の一種が63個体(53.4%)で全体の半分以上を占め、これが最優占種であった(図4)。以下ツチトビムシ科のベソッカキトビムシが31個体

(26.3%)、シロトビムシ科のニッポンシロトビムシ17個体(14.4%)が優占種で、これら3種で海岸サンプル全体の94.1%を占めた。

両植生を比較すると、湿原は全部23種であり、そのうち優占種6~7種(ハイイロツチトビムシ、ニッポンシロトビムシとヒサゴトビムシなど)がおおよそ等個体数で構成している。一方、海岸は全部8種からなり、1~2種(フクロムラサキトビムシ属の一種とベソッカキトビムシ)に集中する傾向にあった。

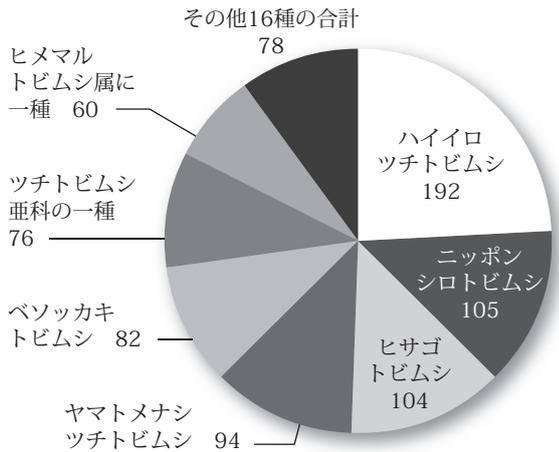


図3 当縁湿原の主なトビムシ個体数

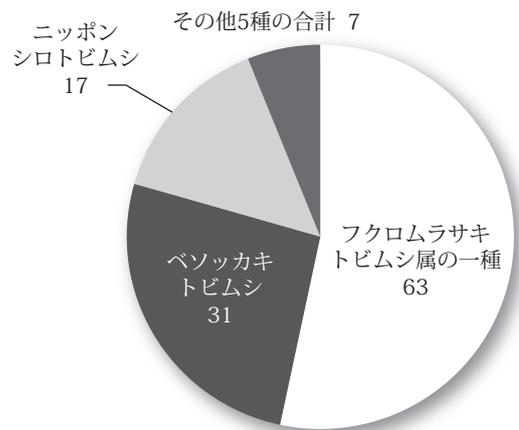


図4 当縁海岸の主なトビムシ個体数

湿原からのみ抽出されたトビムシは、多数でハイイロツチトビムシ、ヒサゴトビムシ、ヤマトメナシツチトビムシ、ツチトビムシ亜科の一種、ヒメマルトビムシ属の一種、少数でヤチナガツチトビムシであった(別表)。一方、海岸草原からはフクロムラサキトビムシ属の一種のみであった。科レベルでは、湿原のみはイボトビムシ科、ミジントビムシ亜目とマルトビムシ亜目であった。

湿原、海岸の共通種はベソッカキトビムシ、ニッポンシロトビムシ、キノボリヒラタトビムシの3種であった。

以上これらから、湿原と海岸のトビムシ種構成ははっきり違った様相であった。これは海岸草原がリター層少なく、乾湿や温度変化が激しく、塩分濃度が高いところで、トビムシの生息環境としては厳しいところから、その環境に耐えられる種に限定されるからであろう。特に、フクロムラサキトビムシ属の一種は海岸特有の海浜性トビムシと思われる。一方、ベソッカキトビムシは森林・草原土壌だけでなく、高山などや厳しい環境でも広く分布する種で、その地の優占種

になることが一般に多い。当縁海岸では海浜の厳しい環境だけでなく、他の競合種が少ないため、ベソッカキトビムシが優占種になったと思われる。

2) 帯広農高カシワ林との比較

前回報告した帯広農高カシワ林と比較する(須摩, 2020)。カシワ林では11科39種1,316個体が抽出されたが、その種構成はツチトビムシ科のコサヤツメトビムシ(成虫、幼虫を含め)の752個体(57.1%)で、全体の半分以上占めた。次に同科のハイイロツチトビムシ、シロトビムシ科のヤツメシロトビムシ、ムラサキトビムシ科のカッシュクヒメトビムシの順でそれぞれ116個体(8.8%)、70個体(5.3%)、63個体(4.8%)であった(図5)。この様にコサヤツメトビムシが全個体数の半分以上占めたのが最大の特徴であった。これらと比較すると、当縁湿原の種を初めその割合も大きく異なる結果となった。

一方、海岸植生の種と大きく違うが、海岸植生の1~2種に集中する種構成に良く似ていた。しかし、種が大きく異なるので、同じとは言えない。

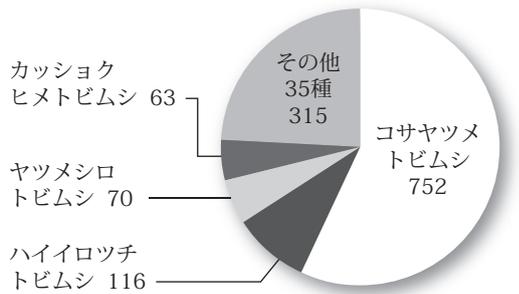


図5 帯広農高カシワ林の主なトビムシの個体数 (須摩, 2020)

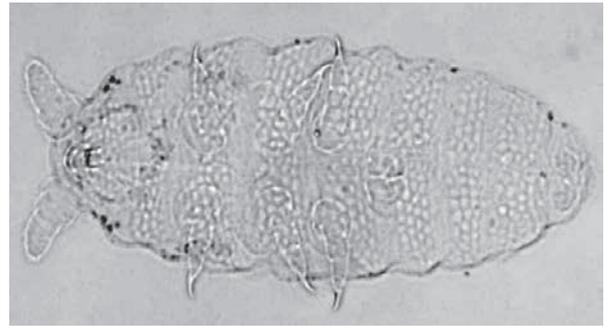


図6 コバントビムシ *Captanurina koban* の背面

3) 十勝地方の未記録トビムシと注目種

今回抽出された11科23種で、同定されたのは9科18種である。その内十勝管内未記録種はコバントビムシとヤチナガツチトビムシの2種であった。2種は何れも当縁湿原の高層湿原から抽出された。

イボトビムシ科 (コバントビムシ亜科) のコバントビムシ *Captanurina koban* Tanaka, Suma & Hasegawa, 2014が3個体抽出された (図6)。この種はこれまで道内の利尻島、礼文島、音威子府、アポイ岳の4

か所であった。この種の個体数は少なく、これまでの植生は深山、高山など森林土壌で見られ、今回湿原から確認されたのは初めてであった (プレパラートNo.5058, 5087)。今回の体長は0.65mmと小さく、PAOの縁瘤が8個なので幼生であろう。成体は体長1.18mm、PAOの縁瘤が10個、眼は3+3個、白体色、体型は長楕円形である。その上、跳躍器なく、肢など付属器が小さいことから地中性トビムシであろう。分布は北海道と本州青森県である (Tanaka, *et. al.* 2014)。



図7 ヤチナガツチトビムシ *Anurophorus rarus* の腹面



図8 フクロムラサキトビムシ属の一種 *Ceratophysella* sp.の側面

ツチトビムシ科のヤチナガツチトビムシ *Anurophorus rarus* (Yosii, 1939) は20個体抽出された (プレパラートNo.5054, 5086, 6093) (図7)。体長約1.5mm、体色は灰色から青紫色、体型は細長い筒型である。跳躍器、保体なし、腹部第6節に1対の肉トゲを持つのが特徴で、その表面は先端まで顆粒状である。分布は北海道、四国、朝鮮である (青木, 2015)。

これで十勝地方のトビムシ種数は2種を加え13科98種類になった。

その他注目種として、海岸から最優占種ムラサキトビムシ科フクロムラサキトビムシ属の一種 *Ceratophysella* sp. が63個体抽出された (プレパラ

ートNo.6134, 6135) (図8)。その内ほとんどは体長0.6~0.8mmの幼虫であるが、体長が1.0~1.2mmは成体と思われる。その体色は濃い褐色で、体型はズングリ型で腹部第6節背面に1対の尾角を持つ。体表面はケバのない大小の毛で覆われる。眼は8+8、PAOの4縁瘤は前方の2葉は大きく、後方の2葉は副瘤を囲まない。カシヨクヒメトビムシに似るが、触角第4節の釘状毛がないこと、各肢1本の粘毛は先端が尖らなく、棒状で長く主爪の先端に届き、跳躍器茎節後面の7本の毛のうち基部の1本が細く長いことで区別される。また、腹部第4節腹面に跳躍器が開かれている時に左右に髪が出来る。これは跳躍器開閉時の折り目であろう。

海浜性トビムシと思われる。

要 約

- 1) 大樹町当縁湿原と当縁海岸の土壌サンプルから12科27種 (sp. cf. 幼虫を含む) 909個体のトビムシ類が抽出された。その内、同定出来たのは9科18種、687個体であった。
- 2) 湿原の2個の土壌サンプルから、11科23種791個体が抽出された。種構成はハイイロツチトビムシが1番多く、全体の24.3%、2番目はニッポンシロトビムシ13.3%、3番目ヒサゴトビムシ13.1%、以下ヤマトメナシツチトビムシ、ベソッカキトビムシであった。優占種はおおよそ等個体数構成であった。
- 3) 海岸草原の1個の土壌サンプルは、5科8種118個体、フクロムラサキトビムシ属の一種が63個体(53.4%)で、最優占種であった。1種に集中する個体数構成であった。
- 4) 湿原のみの種はハイイロツチトビムシ、ヒサゴトビムシ、ヤマトメナシツチトビムシ、ツチトビムシ亜科の一種、ヒメマルトビムシ属の一種、少数でヤチナガツチトビムシであった。海岸草原からはフクロムラサキトビムシ属の一種のみであった。湿原と海岸の共通種はベソッカキトビムシ、ニッポンシロトビムシ、キノボリヒラタトビムシの3種であった。
- 5) 帯広農高カシワ林と当縁湿原は、種とその割合に大きく異なる種構成であった。一方、海岸植生は種が大きく違うが、1種に集中する海岸植生に似ていた。
- 6) 十勝管内未記録種はコバントビムシとヤチナガツチトビムシの2種であった。2種は何れも当縁湿原の高層湿原から抽出された。海岸から海浜性トビムシと思われるフクロムラサキトビムシ属の一種が抽出された。十勝地方からのトビムシ種数は2種を含め13科98種類になった。

謝 辞

今回の報告は大樹町当縁湿原と当縁海岸草原の環境調査のため、調査された大西 純氏(河西郡更別村在住)からトビムシ液浸の提供を受けたものであり、十勝地方の湿原・海岸のトビムシを研究するうえで貴重なサ

ンプルであった。そのサンプル提供に対して感謝申し上げる。また、氏からはまとめるに当たり数々の助言を頂き、そのうえ調査地の写真もお借りした。合わせて大西氏にお礼を申し上げる。

参考文献

- 青木淳一編著. 2015. 日本産土壌動物一分類のための図解検索一(第二版). 1969pp. 東海大学出版部. 神奈川.
- Hishi, T., Tashiro, N., Maeda, Y., Inoue, S., Cho, K., Yamauchi, K., Ogata, T., & Mabuchi, T. 2012. Soil depth distribution and the patterns of alpha- and beta-diversity of families of soil Collembola in cool-temperate deciduous natural forests and larch plantations of northern Japan. *Edaphologia*, 91: 9-20.
- 町田龍一郎編著. 2020. 日本昆虫目録 第1巻 無翅昆虫各目. i-xxvi+106pp. 権歌書房. 東京.
- 新庄久尚. 2020. 北海道大樹町当縁川河口域に残存する湿原植生(基礎調査). 日本湿地学会部会・北海道湿地コンソーシアム講演要旨.
- 須摩靖彦. 1984. V. 道東海岸線のトビムシ相. 道東海岸線総合調査報告書: 127-148. 釧路市立博物館. 釧路.
- 須摩靖彦. 1993. 阿寒国立公園の樹上性トビムシについて—1991~1992年調査—. *Sylvicola*, 11: 17-26.
- 須摩靖彦. 1994. 第1項トビムシ目. 阿寒国立公園の自然1993: 1004-1026, 1097-1104. 前田一步園財団. 釧路市.
- 須摩靖彦. 1995. 第1節トビムシ目. 阿寒国立公園昆虫目録: 11-15, 43-49. 前田一步園財団. 釧路市.
- 須摩靖彦. 2020. 帯広農高カシワ天然林のトビムシ類. 浦幌町立博物館紀要, 20: 9-14.
- 須摩靖彦・山崎穂菜美. 2013. ライトトラップで採集された北海道未記録のタテジマアヤトビムシ. *Jezoensis*, 39: 94-100.
- Tanaka, S., Suma, Y. & Hasegawa, M. 2014. A new species of the *Caputanurina* (Collembola: Neanuridae) from Japan. *Edaphologia*, 94: 15-49.
- Uchida, H. & Suma, Y. 1973. Descriptions and records of Collembola from Hokkaido IV. *Kontyu*, 41(2): 183-188.
- 矢部和夫. 2016. 十勝海岸の2つの自然草原～湿原と

海岸草原の特徴と希少性～. 記録集2016シンボ
ジウム十勝海岸の自然を考える～湿原・湖沼・
海岸線の現状と将来～：5, 8-13.

浦幌町立博物館紀要20 (2020)：9-14、「帯広農高カシワ天然林のトビムシ類」の正誤表

9ページ右下から5行目	稲多町→稲田町
13ページ右4行目	Toshiro→Tashiro
14ページ別表16行目	Brachystomellidae サメハダトビムシ科→Odontellidae ヒシガタトビムシ科
同19行目	Pseudachorutinae ヤマトビムシ亜科→Frieseinae シリトゲトビムシ亜科
同21行目と22行目の間に	「Pseudachorutinae ヤマトビムシ亜科」を挿入する

別表. 大樹町当縁湿原と海岸のトビムシと個体数 (2017年調査)

土壌サンプル採集者・抽出者：大西 純

		土壌サンプルの植生		湿原		海岸			
		調査日		7.24		11.11			
No.	学名	和名	土壌サンプルNo.	①	②	③	合計	順	
		Hypogastruridae		ムラサキトビムシ科					
1	<i>Xenylla brevispina</i> Kinoshita, 1916	キノボリヒラタトビムシ		4	12	3	19		
2	<i>Ceratophysella denisana</i> Yosii, 1956	カッシュクヒメトビムシ		2			2		
3	<i>Ceratophysella</i> sp.	フクロムラサキトビムシ属の一種				63	63		
4	<i>Hypogastrura</i> sp.	ムラサキトビムシ属の一種		2			2		
		Onychiuridae		シロトビムシ科					
5	<i>Lophognathella choreutes</i> Börner, 1908	ヒサゴトビムシ		84	20		104		④
6	<i>Paronychiurus japonicus</i> (Yosii, 1967)	ニッポンシロトビムシ		103	2	17	122		②
		Odontellidae		ヒシガタトビムシ科					
7	<i>Xenyllodes armatus</i> Axelson, 1903	チビサメハダトビムシ				1	1		
		Neanuridae		イボトビムシ科					
		Frieseinae		シリトゲトビムシ亜科					
8	<i>Friesea (Friesea) japonica</i> Yosii, 1954	ヤマトシリトゲトビムシ		10			10		
		Pseudachorutinae		ヤマトビムシ亜科					
9	<i>Pseudachorutes</i> sp.	ヤマトビムシ属の一種		2			2		
10	<i>Micranurida pygmaea</i> Börner, 1901	チビヤマトビムシ		1			1		
		Caputanurinae		コバントビムシ亜科					
11	<i>Caputanurina koban</i> Tanaka, Suma & Hasegawa, 2014	コバントビムシ		3			3		
		Neanurinae		イボトビムシ亜科					
12	<i>Neanurinae</i> sp.	イボトビムシ亜科の一種		2			2		
		Isotomidae		ツチトビムシ科					
13	<i>Anurophorus rarus</i> (Yosii, 1939)	ヤチナガツチトビムシ		2	18		20		
14	<i>Folsomia octoculata</i> Handshin 1925	ベソッカキトビムシ		80	2	31	113		③
15	<i>Ballistura takeshitai</i> (Kinoshita, 1916)	タケシタクロトビムシ				1	1		
16	<i>Isotomiella japonica</i> Tanaka et Nijjima, 2009	ヤマトメナシツチトビムシ (含む幼虫)		94			94		⑤
17	<i>Desoria dictaeta</i> (Yosii, 1969)	ハイイロツチトビムシ (含む幼虫)		192		1	193		①
18	<i>Isotominae</i> sp.	ツチトビムシ亜科の一種		72	4		76		
		Tomoceridae		トゲトビムシ科					
19	<i>Tomocerus (Tomocerus) jesonicus</i> Yosii, 1967	エゾトゲトビムシ				1	1		
20	<i>Tomocerus (Tomocerus)</i> sp.	トゲトビムシ亜属の一種		1			1		
		Neelidae		ミジントビムシ科					
21	<i>Megalothorax minimus</i> Willem, 1900	ケントビムシ		1			1		
22	<i>Neelides minutus</i> (Folsom, 1901)	ミジントビムシ		2			2		
		Sminthurididae		オドリコトビムシ科					
23	<i>Sminthurides</i> sp.	オドリコトビムシ属の一種		5			5		
		Arrhopalitidae		ヒトツメマルトビムシ科					
24	<i>Arrhopalites octacanthus</i> Yosii, 1970	オオツノヒトツメマルトビムシ		1			1		
		Katiannidea		ヒメマルトビムシ科					
25	<i>Sminthurinus</i> sp.	ヒメマルトビムシ属の一種 (含む幼虫)		60			60		
		Bourletiellidae		ボレーマルトビムシ科					
26	<i>Heterosminthurus</i> cf. <i>nymphes</i> Yosii, 1970	クチヒゲマルトビムシに酷似種		2			2		
		Sminthuridae		マルトビムシ科					
27	<i>Neosminthurus mirabilis</i> (Yosii, 1965)	オウギマルトビムシ		6	2		8		
				個体数合計		731	60	118	909
				種数		23	7	8	27

2020.8.13.作製

生剛村第二岐阜殖民合資会社岐阜農場、農場主大野亀三郎、 管理人下野松太郎に関するメモ

後藤秀彦¹⁾

Hidehiko Goto, 2021. A basic study on the owner of ranch Kamesaburo Ohno and farm manager Matsutaro Shimono
in the Gifu Farm of the Gifu Syokumin Limited Partnership Company in Seigo-mura.
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 21: 17-31.

1. はじめに

生剛村（現浦幌町）の下浦幌原野に所在した岐阜農場は、美濃国に本社を置く、第二岐阜殖民合資会社の経営になるものである。明治中期以降の北海道開拓の形態は、企業・団体・個人など多様であるが、岐阜農場は北海道開墾を目的とする会社の手によるもので、十勝では幕別村の南勢開墾合資会社農場、音更村の美濃開墾合資会社土幌農場、人舞村の十勝開墾合資会社農場、勇足村の合名会社利別農場などの例がある。

この第二岐阜殖民合資会社を設立したのは、岐阜県選出衆議院議員大野亀三郎（図1）と同県議員脇田



図1 大野亀三郎
（筆者 旧蔵）

静三である。大野は、1861（文久元）年8月2日に美濃国稲葉郡岩村（現岐阜市）で、農業大野八右衛門の長男として出生。1880（明治13）年岐阜県立中学校を首席で卒業したと言われる。その後、岐阜県会議員を経て、1892（明治25）年2月第2回衆議院議員選挙に岐

阜県第1区から出馬し、当選。その後、第11回総選挙まで連続10回当選を果たしたが、10期目の任期中の1914（大正3）年4月7日死去した。この間、北海道開拓事業に関心を寄せて、栗沢村と生剛村に農場を開くなど、大きな功績を残した。同氏の人物像や初期の経歴について、児玉九峯・藤田桜鉄（1894）は、次のように評している。

大野亀三郎君

輕暢にして多弁ならず、優美にして雅に失せず態度整肅、威儀嚴正親しむべく狎るべからず眞個紳士の標本、才子の雛形たるは大野亀三郎君か、然れども予が君に推服する所以のものは其紳士的、才子的たるにあらず、意気豪邁志操卓落、性亦快活跌宕にして、迫らず驚かず、綽々として一個豪傑の風を存するにあり、蓋し得難きの人物なり。

君の中学校にある才名己に全校を圧す、第一回卒業に於て君其第一位を占め卒業の榮を受く、曾て一たび本県に徴せられ暫く官海に入ると雖とも是れ君の志にあらず、故に辞して復た就かず、家居力を実業致す君の北海道開拓事業は実に此時に胚胎するものなり、幾許もなく推されて県議員となり、常置委員を勤む、第三期議会の解散となるや、君乃ち自ら起つて競争場裡に入り、天野若円故馬淵与曹の兩名士と戦ふて之れに勝ち名譽の冠冕を得たり、眞個に是れ潜龍雲を得、臥虎風に遇ふの觀、震災問題の起る君政府を助けて、自由党の驍將齋藤代議士と大に院内に舌戦し、名声頓に揚り朝野に噴々たり、其演説中若し千三百間の土橋あらば実に天下の奇觀なりと罵倒一番したる処千鈞の重あり、第三期議会の解散となる君復た推されて議員となる、県下七代議士中再撰を得たるは独り君のみ、徳望あり敏腕あるにあらずんば焉んぞ斯の如くなるを得ん、君嚮きに北海道開拓事業を企て現に事に茲に従へり、成績未だ聞くを得ざるも君の才を以てして必ず成すあるを信ず、君請ふ之れを勉めよ。

大野は、北海道開拓事業に関心を示す一方、興業銀行や岐阜移民の役員を務めるとともに、日本興業銀行設立委員となり、1888（明治21）年2月から同25年3月までの岐阜県会議員を経て、1892（明治25）年の第2回選挙から衆議院議員となり、帝国党、大同俱

1) 帯広大谷短期大学 〒080-0335 北海道河東郡音更町希望が丘3番地3

楽部、中央倶楽部などに所属した（岐阜県編、1980）が、任期中途に死去、墓碑は岐阜市岩滝の醍醐山眞願寺にある。

また、大野とともに会社を設立した脇田静三についても同じく『濃飛名誉人物評・下』が触れている。

脇田静三君

方県郡中の有力家を以て君を呼ぶ何人も首肯すべし、方県郡中の熱心家を以て君を称す誰れか復た異議せんや、然り君は熱心なり故に能く公共の事に尽す、然り君は、有力なり、故に能く企図の業を成す、夫れ然り今日方県郡の事業君の力に依て功を奏せしもの、固より優指するに違あらざるなり、君資性温順なりと雖とも其公共事業に従ふに当てや、意気満々思ふ所を計り、為す所を遂げ、「業不驚人死不休」の風あり、宜なり今や君撰ばれて県会議場に登る、予好箇の議員を得たるを喜ばざるを得ず、思ふに君が県下の有力家、県下の熱心家なりと称揚せらるる遠きにあらざるべし、聞く君は大野亀三郎君と共に北海道開拓事業に熱心なりと、然らば即ち君は独り濃飛二州のみならず、還た日本に於ける一有力家と目せらるるの期あらん、予は国家の為に目を刮て之れを待つ。

この脇田静三について、間宮不二雄（1949）は、「岐阜本店の支配人は脇田静造氏（筆者註：静三の誤り）」と云い、優れた手腕家であった」と評している。

『濃飛名誉人物評』中に、「君撰ばれて県会議場に登る」とあり、1894（明治27）年3月から1899（明治32）年9月まで、岐阜県会に議席を持っていた。大野亀三郎の県会議員時期とは重ならない。前半は方県郡、後半は稲葉郡からの出馬である（岐阜県編、1980）。

2. 大野亀三郎と脇田静三の石狩国幌向原野の農場開設

大野が、北海道開拓に興味を示したのは、1889（明治22）年のことと言われる。1891（明治24）年4月10日付『岐阜日日新聞』に「一昨年（明治22年）以来数々同道に渡航し、各地を跋涉し数ヶ処の植民地を選定」（中村、1998）とあり、遅くとも、この年には大規模な北海道開拓構想を抱いていた。

また、同年7月5日付『北海道毎日新聞』にも、次のような記事が掲載されており、大野の動向の一端を知ることができる（岐阜県歴史資料保存協会編、

1998）。

岐阜県の豪農大野亀三郎氏が殖民事業の見込を以て来道せしよしは、去る三日の本紙上へ掲げたりしが、尚ほ聞く所に抛れば、此は岐阜県会常置委員にて、一昨年夏季も数月間本道内部を跋涉し、昨年も亦た各地を廻遊し、気候地質基地各殖民地並農場等の組織方法を取調べ、昨年九月帰県し、夫より同県下有力者と計り、愈資本金十万円を以て岐阜殖民法と称する一社を創立し、拓地事業に従事するの見込にて、土地撰定の為め今度来道せしものなりと。また同社は同県下の多額納税者並大地主等、真に有力なる数氏の結合にして、同県選出の貴衆両院の代議士等も加入し居れり、現に同株主なる衆議院議員長尾四郎右衛門氏も、本月中旬頃現地出発、他の同志と共に来道の筈なり、同氏は従来製糸製茶並に鉱山事業等に従事し、衆議院代議士中屈指の財産家なるよし。

これによれば、1889（明治22）年夏から数か月間にわたって北海道内を踏査、翌年も来道して各地を周遊し、気候、地質、基地、殖民地を調査、合わせて農場等の組織方法などについても研究した。同年9月に岐阜県へ戻ると、県内の有力者と協議し、資本金10万円をもって岐阜殖民法を創立、この時期は、大野が岐阜県立中学校を卒業して岐阜県官吏となるも、まもなく辞職、その直後から岐阜県議員に当選することと考えられ、この間に北海道開拓事業への参加が決意されたようである。

前述の『北海道毎日新聞』の記事の、「真に有力なる数氏」中には、「衆議院代議士中屈指の財産家」であった長尾四郎右衛門が含まれており、ほかに「同県選出の貴衆両院の代議士等も加入」している。そのうちの一人が脇田静三なのであろう。

1890（明治23）年には、その脇田静三も同行し、北海道庁長官永山武四郎に面会して、北門開拓の意思を伝え、長官の指示によってアイヌを道案内として夕張川を遡り、幌向原野を踏査して38万3,500坪の貸下を出願、翌年貸下認可となった。

この農場の管理人は、岐阜県稲葉郡那加村の浅野太平治が務めたが、後に生剛村の岐阜農場管理人となる下野松太郎も副支配人として、また下野に同行して生剛村入りした河合長平も入植している。この農場は、「岐阜殖民法農場」と呼ばれている（図2）。

なお、『栗沢町史』（稲童丸、1964）には、1893（明治26）年、6人を加えて合資会社岐阜殖民法が創



図2 岐阜殖民社開拓記念碑

立したとの記述があるが、前掲史料にあるように、1891（明治24）年が正しいようである。

続いて、大野は、岐阜県山県郡世保村の小川彦三郎とともに、同じく夕張川沿岸の未開地68万7,000坪の貸下を受け、1891（明治24）年から準備を始め、2年後、小作人を募集して本格的な開拓事業に着手している。この農場は、「美濃開墾」と呼ばれる。当地には、ほかにも札幌の後藤米七の「後藤開墾」があった。

3. 1891（明治24）年以降の岐阜県の状況と大野亀三郎の動き

中村英重（1998）によれば、岐阜県からの最初の北海道移住は、1880（明治13）年のことであったという。安八郡今尾村の岩永新三郎が、有志46、7人を募って厚生社を結成、山越郡越内村に入植した。しかし、これは単発的な例であるという。

こうした前例はあったが、大野が動きだした1889（明治22）年は、岐阜県内では他に例の無いほど早期の動きであり、その後の岐阜県から北海道移住に大きな影響を与えた。事実、武儀郡中有知村の中田宮五郎を団体長として音更村に入植した武儀団体も事前に大野亀三郎のアドバイスを受けている（音更町史編さん委員会編、1890）。

偶々岐阜県選出代議士大野亀三郎氏北海道ニ土地ノ貸付ヲ受ケ小作募集セラルルヲ聞キ同氏ヲ自宅ニ訪ヒ北海道ノ事情ヲ聞クニ前途有望ナルト見、遂ニ意ヲ決シ北海道移住ヲ志ス

岐阜県、殊に南部は、木曾川・長良川・揖斐川の氾濫洪水の常襲地帯で、輪中という独特の居住形態が発展したことで知られる。

このような地域に、1891（明治24）年10月28日午前6時38分、本巣郡根尾村（現本巣市）付近を震

源とするM8の直下型の濃尾大地震が発生した。日本の陸域で発生した地震としては、観測史上最大と言われ、岐阜県、愛知県が大被害を受け、岐阜県では総戸数182,499戸中、全壊37,472戸、半壊8,157戸、火災類焼5,564戸、死者4,134人、負傷者6,122人、愛知県では全壊11,224戸、死者2,268人の未曾有の大災害となった。災害地向け救恤品の無賃輸送が初めて行われた災害でもある。

この震災を受けて、11月1日には「中正日報」が社説「震災地貧民救済の一策」で、「貧民を移して北海道に住せしむるに在るのみ」、「北海道不毛の地を拓ひて北門の鎖鑰を巖にす。貧民の利、国家の益之より大なるはなし」を主張し、岐阜県の貧民を北海道へ移住させて「不毛の地を拓」すことを目指した。ちなみに、この新聞は、この前年に創刊された東京の保守系新聞で、読売新聞や東京朝日新聞も同趣旨の社説を掲載した。

つまり、東京を中心とした有カマスコミが、岐阜・愛知両県の農民を対象に、北海道移住のキャンペーンを張ったのである。

11月23日には、席田・方県・本巣・厚見・山県の5郡と岐阜市の住民数百人が震災救済請願のため県庁に押し掛ける騒ぎが起こり、翌24日には市内で暴動が発生し、警官が抜剣して鎮圧に当たるといった事件が起きた。

1892（明治25）年には、岐阜県下で、濃尾震災義捐金分配と小作料引き下げを巡って農民騒擾が頻発した。濃尾大地震をきっかけとして岐阜県下は大揺れしたのである。

少し、時間は下るが1905（明治38）年時の岐阜県の状況について、『殖民公報』（北海道庁殖民部拓殖課編、1905）は、次のように伝えている。

移住の原因は人口に対する耕地の不足生計の困難にありと雖も尚ほ先移住者の誘導によりて移住の決心をなすもの多きに居る而して従来経験によれば移住者の多少に大なる関係を有するは農作豊凶にして豊作の翌年は移住者少なく凶作の翌年は移住者多きを例とす

要するに岐阜県は、慢性的に人口に比して耕地が少ない。そのため先に北海道へ移住し、成功した者からの招請により、移住を決心する者が多いということである。また、豊作の翌年は移住者少なく、凶作の翌年は多いという傾向もあるという。

しかしながら、人口の割に耕地が少ないという傾向は、全国的なもので、故郷を離れ、北海道移住を決意する最大のポイントが「耕地不足」という点にあることは、『殖民公報』などに掲載されている他県の状況を概観しても共通している。

4. 生剛村岐阜農場の開設

十勝国の原野選定は、北海道庁五等技師内田澁を殖民地撰定主任として、調査監督柳本通義とともに1888（明治21）年に実施された。選定された原野は、十勝郡ではタンネヌタ、ウラホロ、トカチの3原野で、これらはいずれも現在の浦幌町域の南部に所在している（北海道庁第二部殖民課、1891）。浦幌川中・上流部の調査は終わらなかったため、1890（明治23）年に先送りされた（神埜、1995）。このウラホロ原野は、後に浦幌原野となり、下浦幌・中浦幌・上浦幌の3原野に分割されて表記されるようになる。

このうち、下浦幌原野には当初、岐阜農場、土田農場、熊谷農場の3農場が相次いで開設され、それぞれ小作人を募移して開拓事業を行った。岐阜農場の初期の姿や経過については、『北海道殖民状況報文・十勝国』に詳しいのでここに引用しておきたい（河野・一色、1901）。

岐阜殖民合資会社 該社ハ岐阜県下美濃国大野亀三郎、脇田静三外数名ノ組織ニシテ資本金十万円トシ本社ヲ美濃国ニ置キ明治二十九年下浦幌原野ニ於テ二百九十九万余坪ノ貸付ヲ受ク其地十勝川ノ北岸二位シ浦幌川ニ沿ヒシタコロベ川ニ跨リ河畔ハ地味肥沃ナリト雖モ少シク内部ニ至リテハ泥炭性湿地少ナカラス同年八月農場管理人下野某小作人一戸ト共ニ移着シプラオ三台ハローニ台ヲ購求シ人夫ヲ雇ヒ凡三十五町歩ヲ墾成シ草小屋三十棟ヲ造リ翌年移民到着ノ準備ヲナス翌三十年小作人五十九戸ヲ募移シ内四戸ハ移住ノ後他ニ転セリ同三十一年十六戸ヲ募移シ現在七十一戸トス其小作人ハ岐阜県五十四戸富山県八戸石川県六戸其他諸県人アリ小作人トノ契約ハ一戸一万五千坪ヲ配当シ五ヶ年間ニ墾成セシメ又一ヶ年間ノ食料ト農具、種子、家具等ヲ現品ニテ貸付シ又小屋掛料七円ヲ給シ之レヲ三ヶ年乃至五ヶ年賦ニ返納セシム其開墾料ハ一反歩ニ付樹林地ニ円草草地ハプラオ馬等ヲ使用セシメ五十銭ヲ給ス而シテ小作料ハ一畝下三ヶ年ヲ与ヘ四年目一反歩ニ付五十銭トシ五年目同七十五銭六年目同一円ト定メ其後ハ附近農場ノ情況ニ対

比シテ改変スルト云フ明治三十年百二十町歩同三十一年約二十五町歩ヲ墾成シ平均一戸二町歩余ニ当レリ別ニ農場用トシテ試作地ヲ設ケタリ又農場直接ノ事業トシテ排水溝數百間ヲ設ケリ小作人中プラオハローヲ有スル者五名ニシテ馬ハ一頭乃至五頭ヲ有スル者十三人アリ別ニ農場事務所ニ九頭ヲ飼養セリ

小作人中明治三十年ニ移住セシ者ハ食料其他ノ貸付額ヲ合セ一戸平均百二十余円ニ上レリ特ニ同年ハ不作ナリシ為メニ其收穫物ヲ以テ翌年秋収迄ノ食料ヲ持続スル能ハス更ニ三十一年ニ於テ諸品ノ貸付ヲ受クルニ至レルヲ以テ其金額モ亦少ナカラサルヘシ

また、安田巖城も『十勝史』中で、「下浦幌岐阜開墾地沿革」（安田巖城著・後藤秀彦校註、2020）と題して記述しているので、これも合わせて引用しておく。

明治二十九年五月予定存地同三十一年二月第二岐阜殖民合資会社に貸付せられ同三十七年付与せらる地積百七十四万四千二百十二坪にして現在小作七十二戸あり岐阜県稲葉郡芥見村下野松太郎氏（三十三歳）是を管理せり氏は熱心職に当り処置当を得住民安堵し隆盛年に加はる附属牧場として六百万坪の地積あり明治三十六年貸付せらる種馬佛国三回乗用雑種ライティン号当年拾參歳丈五尺二寸五分あり本牧場産馬は最も軍用乗馬に適せり而して下野松太郎氏令弟竹夫本牧場管理者たり。

参 考

岐阜殖民合資会社は明治二十七年の創立にして其の第一会社は石狩国真布にあり地積百九十八万坪を有す明治二十九年第二会社を当地に設立し第一会社副支配人たりし下野松太郎氏を抜擢して第二会社管理人とせり。

前者は、1898（明治31）年、後者は1906（明治39）年現在の執筆内容である。この両史料を合わせて読んでみると、農場開設準備はこういうことであったようである。

第二岐阜殖民合資会社は、美濃国の大野亀三郎、脇田静三ほか数名の出資により資本金10万円をもって美濃国で設立された。石狩国清真布の農場を第一会社とし、生剛村の岐阜農場は第二会社という位置付けである。1896（明治29）年5月予定存置の指定を受け、同年貸付を受けた。面積は、299万余坪。場所は、十勝川の北岸で、浦幌川に沿い、下頃辺川に跨る範囲。地味は、河畔は肥沃であったが、泥炭性湿地もあった。同年、第一農場副支配人だった下野松太郎が管理人に

抜擢され、小作人1戸とともに移着し、プラウ3台とハロー2台を購入して人夫を雇い、約35町歩を墾成、草小屋30棟を造作して、翌年の小作人入地に備えた。

5. 下野甚助と下野家三兄弟

第二岐阜殖民合資会社岐阜農場の管理人下野松太郎(図3)は、1873(明治6)年2月22日、岐阜県稲葉



図3 下野松太郎(筆者蔵)

郡芥見村芥見92番戸の下野甚助とていひの五男六女の二男として出生。県立農学校卒業後、親戚筋に当る大野亀三郎の設立した岐阜殖民社に勤務した。1893(明治26)年に幌向原野の岐阜殖民合資社農場に土地区画完成を待って入地し、農場管

理人浅野太平治、西村某、浅野伊三郎らと同居して、馬耕に着手した。当時20歳であった。『浦幌村五十年沿革史』によると、2年後の1895(明治28)年頃には、生剛村入りの準備を始めていたとされ、『北海道殖民状況報文・十勝国』によれば、1896(明治29)年8月、小作人1戸とともに現地、生剛村の第二岐阜殖民合資会社の岐阜農場に入った。この間の経緯について、『浦幌村五十年沿革史』には、1896(明治29)年暮れに河合長平が土地選定のため生剛村入りし、下野松太郎と協議して決定とある。これに対して、『移住者成績調査』第貳編の河合長平の項には、「二十八年秋十勝国に趣き土地撰定に奔走し貸下手続をなし十勝郡下浦幌原野に於て三百万坪の貸下許可を得」(北海道庁第五部、1908a)とあり、差異がある。当時、23歳であった。

人物像を窺える史料を示しておく(古川、1926)。

下野松太郎君

岐阜県選出代議士大野亀三郎氏の経営に属する、十勝郡浦幌村岐阜農場管理人下野松太郎氏は、明治六年二月岐阜県稲葉郡芥見村に生る、大野代議士の義弟なり。県立農学校を卒業して、廿七年大野氏の農場管理人として渡道石狩国に来る。廿九年大野氏の更に農場を十勝郡浦幌村に開くに当り、全農場管理の爲め浦幌に転じ、爾来今日に至るまで其の経営に任ず。氏は大野氏農場管理の傍ら、亦自家の事

業に力を致し、牧場及び商業を兼営す。公人としては最も意を地方公共に注ぎ、町村制施行以前は総代人の職に在り、卅九年四月自治制施行以来は村会議員に挙げられ、村農会長として農事の改善に努め、地方の代表的人物なり。

また、地元で実際に下野松太郎と交流があり、同じ下浦幌原野の森農場管理人だった森直樹は、次のように記している(森、1943)。

岐阜県大野郡出身、農場主大野亀三郎の一門にあり、青年時代相当の学笈を修め、農場経営者としては、剛腹、小作者を愛撫し罪を責むる事寛に行賞する処大に統治の要諦を領得して居られた。政治興味に進出し、第三回浦幌村戸長役場総代に中川氏と選出せられたるを振出しに村治の爲め村長と、支庁、道庁当局に陳情、折衝の運動等は特に同氏の得意とせる処、論理正然、相当議論も闘はし村当局を鞭撻して村治の発展に努力した事は大である。筆者移住当時この下野氏全盛時代で、弟竹夫君と共に村会を牛耳しておった様である。斗酒尚不辭、酒間論談尽くる所を知らず、石原村長、大津蔵之助氏等と交友敦く市街松葉亭などで痛飲数日に及ぶ等、筆者もよく知遇を得たものである。

中川氏が情で人心を牽付けたに対し、この兄弟は知識で事を処理した様である。大正初期東部十勝より道会議員として選挙戦に帯広菅野光民氏と中原の鹿を争ひ、一敗以来榮まず或る程度又健康を害したるの感あり、爾来善良なる村民として大正十年筆者等と提携市政に革進を叫び、村役場の肅正に努めた事もある。市街以南の重鎮として村民の興望を負ったもので、又農場内養老学校創成、橋梁道路の奉仕等は一頭地を抜き熱意があった。酒豪の累で早逝したのは惜まれる処である。

森直樹は、松太郎の交友関係についても言及している。この中に、「斗酒尚不辭、酒間論談尽くる所を知らず、石原村長、大津蔵之助氏等と交友敦く市街松葉亭などで痛飲数日に及ぶ等、筆者もよく知遇を得たものである」とあり、石原重方、大津蔵之助、森直樹らの名前が上がっている。また、これとは別にかつて広業商会広尾主任で、後に漁業家・馬産家として成功した厚内在住の初代齋藤兵太郎とのつきあいもあった(註1)。

下野松太郎の父甚助は、1897(明治30)年4月1日、芥見村と大洞村が合併して成立した新しい芥見村の初代村長を同年6月28日から約1年5カ月間務めた人物である(芥見郷土誌編纂委員会編、1961)。

また、それ以前も芥見村戸長を務めていたようである（大堀、2019）。十勝関連では、『陸別町史』に、陸別町内で最初に土地の貸付許可を受けた人物として記載され、1901（明治34）年1月1日付で陸別原野基線327～354番地228.50haの貸付許可を得ている。しかし、事情は詳らかではないが、3年後の1904（明治37）年1月16日に返還している（陸別町役場広報広聴町史編さん室、1994）。

また、地元岐阜県では、関市の長良川を取水源とする農業水路を稲葉郡大宮村長横山忠三郎らとともに敷設した人物として知られている。当地は、各務原台地などの丘陵地帯で農業用水の不足に永年苦しめられてきたが、1883（明治16）年、空前の大旱魃に見舞われたことから、芥見村長であった甚助は、横山忠三郎とともに各務郡長駒田正忠に協力を求め、駒田から紹介を受けた戸田村の岡田只治や後藤小平治らと「用水建設同盟」を結成、1888（明治21）年に着工し、翌年完成させた（大堀、2019）。



図4 下野直太郎
（筆者蔵）

松太郎の長兄は、直太郎（図4）という。1866（慶応2）年10月24日、芥見村3番地に生まれ、岐阜中学校、東京高等商業学校に進み、2年間の英国留学を経て、1910（明治43）年東京帝国大学講師、1920（大正9）年から東京商科大学教授を務めた。簿記学において、日本で最

初の商学博士の称号を与えられた。直太郎の妻は、勢伊といい、1870（明治3）年12月20日生まれ。岡山県御野郡伊島村大字津嶋の岸本繁三郎の三女である。1916（大正5）年7月24日、父甚助の死去に伴って



図5 下野竹夫

家督相続、1939（昭和14）年11月21日に亡くなった（芥見郷土誌編纂委員会編、1961）。

松太郎の弟は、竹夫（図5）という。竹夫に関する記述が、『東北海道人物画伝1』に見えるので見ておきたい。

十勝郡浦幌村会議員、浦幌青年会長下野竹夫氏は下野松太郎氏の実弟にして、明治九年十月岐阜県稲葉郡芥見村に生る。県立尋常中学校を卒業して、卅三年実兄松太郎氏の管理する岐阜農場事務員として渡道、直ちに浦幌村に来る。

在勤三年、独立して牧場を全地に開き、目下盛んに馬匹の改良、牛畜の蕃殖に従事しつゝあり。氏は牧畜業に絶対の趣味を有し、殆んど他を顧みず、専心斯業の改善発達に努力するものゝ如し。力を公事に注ぐ最も熱心に、総代人、村会議員、学務委員等に挙げられ、青年会長としては、地方風教の維持に努めて村治の発展を図り、十勝産牛馬組合評議員として斯業に貢献し、日本赤十字協賛員たり。

竹夫は、1876（明治9）年10月2日、芥見村で出生した。幼名は、竹三郎といい、1892（明治25）年8月1日武儀郡上有知村の小澤むめの養継嗣となったが、1903（明治36）年3月14日養子縁組を解消。同3月17日、名を竹夫と改め、岐阜市上加納313番戸の篠田治の姪である藤の三女たけと結婚した。

生剛村入りは、1900（明治33）年のことで、岐阜農場事務員としてであるが、3年後に独立して生剛村常盤地区に牧場を開き、前述の『十勝史』にもあるように「本牧場産馬は最も軍用乗馬に適せり而して下野松太郎氏令弟竹夫氏本牧場管理者たり」と、牧場経営に専念していた。その後、芥見村へ戻ることになるが、その時期については『芥見郷土誌』中、「芥見村三役」中の「村長」の項に「大正13年3月27日村長就任」の記載があることから、この少し前かとも思われるが、父甚助が亡くなった1916（大正5）年直後の可能性もある。同書には、ほかにも村会議員・村議会議員、農業委員、米穀配給統制委員、農業青年学校学務委員、藍川中学校組合議員、産業組合監査、農業会理事などに名前が見える。

蛇足であるが、鉄道開通にともなって大津村周辺が将来、農産物の集散基地となると見込んで、当岐阜農場事務員として岐阜県から生剛村入りした者の一人に横山友九郎もいる（渡辺、1926）。

6. 岐阜農場管理人として着任後の下野松太郎

岐阜農場着任後の松太郎の動向について、年譜風に記しておく。

1897（明治30）年、小作人59戸（うち4戸転住）を入植させて120町歩、翌1898年には新たに16戸を入植させて、約25町歩を墾成。

同年9月、十勝川の未曾有の大洪水が発生。『浦幌村五十年沿革史』には、この大洪水の救恤金を巡って、森友石と松太郎は総代大津蔵之助、君貞次、横山友九

郎を訴願。これには生剛村当局も困り果てたが、最後には和解が成立、とある。

1900（明治33）年、実弟竹夫が、事務員として農場入り。3年後に独立して、常盤地区に牧場を開く。

1902（明治35）年1月10日、北海道庁告示第1号「種牡馬検査」に、明治34年11月1日に証明書を下付した馬匹と所有者が告示される。内容は、「2771 乗用雑種雷電 栃毛 九歳 五尺二寸 白糠産 十勝郡生剛村 下野松太郎」。これについて、『十勝史』および『浦幌村五十年沿革史』は、1903（明治36）年に雷電の貸付を受けたと記載しているが、馬名が、前者が「雷電」、後者は「ライティン」と違いがあるが、これは明らかに同一馬であると思われ、『十勝史』などの誤記載と思われる。

1903年4月10日、岐阜県稲葉郡芥見村92番戸下野甚助から分家し、北海道十勝郡生剛村字下浦幌番外地に新本籍を置く。この年30歳。

1904（明治37）年、岐阜農場が174万4,212坪の付与を受ける。

1904（明治37）年度戸別割賦課等級負担額調によると、1等（80銭）から17等（28円）まで17段階ある戸別割賦は、15等（20円）の納税額。

1906（明治39）年、北海道一・二級町村制が施行され、生剛村は二級町村となる。これにより村会が置かれることとなり、松太郎も村会議員に当選。これに伴い、村農会長も務める。戸長役場時代に総代を務めていた時期があるが、明確な年代は明らかではない。同年9月14日、十勝国産牛馬組合が設立認可を受け、評議員に就任。

1907（明治40）年10月23日、かねて内縁関係にあった土井つると結婚（註2）。

1913（大正2）年8月10日執行の第5回北海道選挙に出馬。これについて、前項で触れたように、森直樹が「東部十勝より道会議員として選挙選に帯広菅野光民氏（註3）と中原の鹿を争ひ」と、述べている（森、1943）。

選挙結果は、次のような内容である（北海道議事事務局編、1955）。

松本今次郎	388票	
三井徳宝	366票	
菅野光民	277票	
下野松太郎	274票	次点
林重蔵	247票	

1914（大正3）年4月7日、農場主大野亀三郎没。

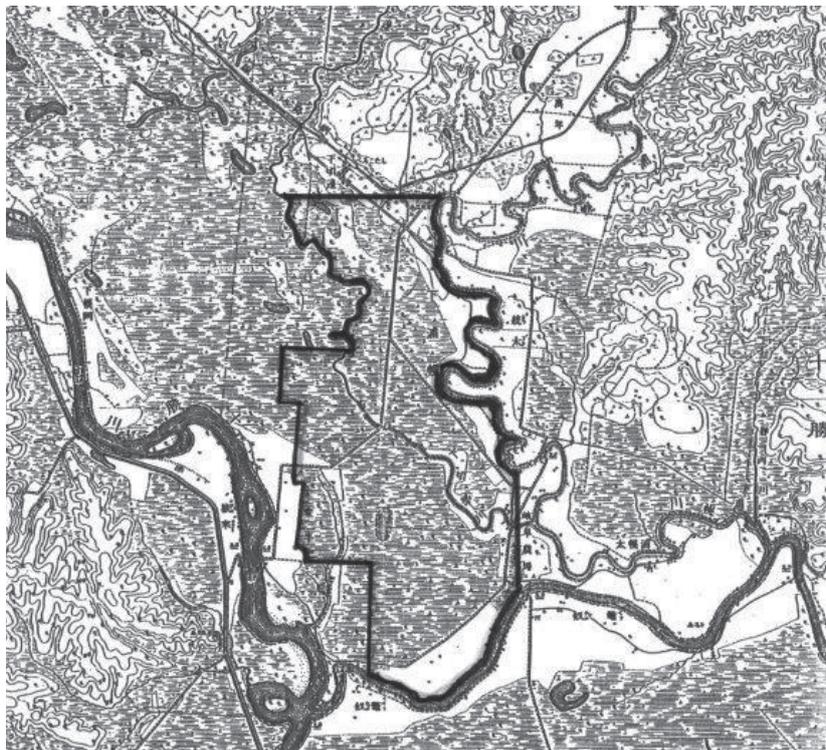


図6 岐阜農場の所在と範囲

享年54歳。これにより、家督は同年12月4日大野三郎に譲られる。

1915（大正4）年頃、松太郎の長女志津起の夫である後藤仙桂一家が、空知郡上富良野村字上富良野西9線167番地から岐阜農場入り。以後、岐阜農場の経営に関わるようになる（註4）。

1921（大正10）年、森直樹らと村政の革新を叫び、村役場の肅正に努める。内容は、詳らかではないが、当時の村長は井上吉衛という人物。

1925（大正14）年8月2日、岐阜農場が蘇原銀行に譲渡される。

1926（大正15）年3月1日、松太郎の妻つる没。

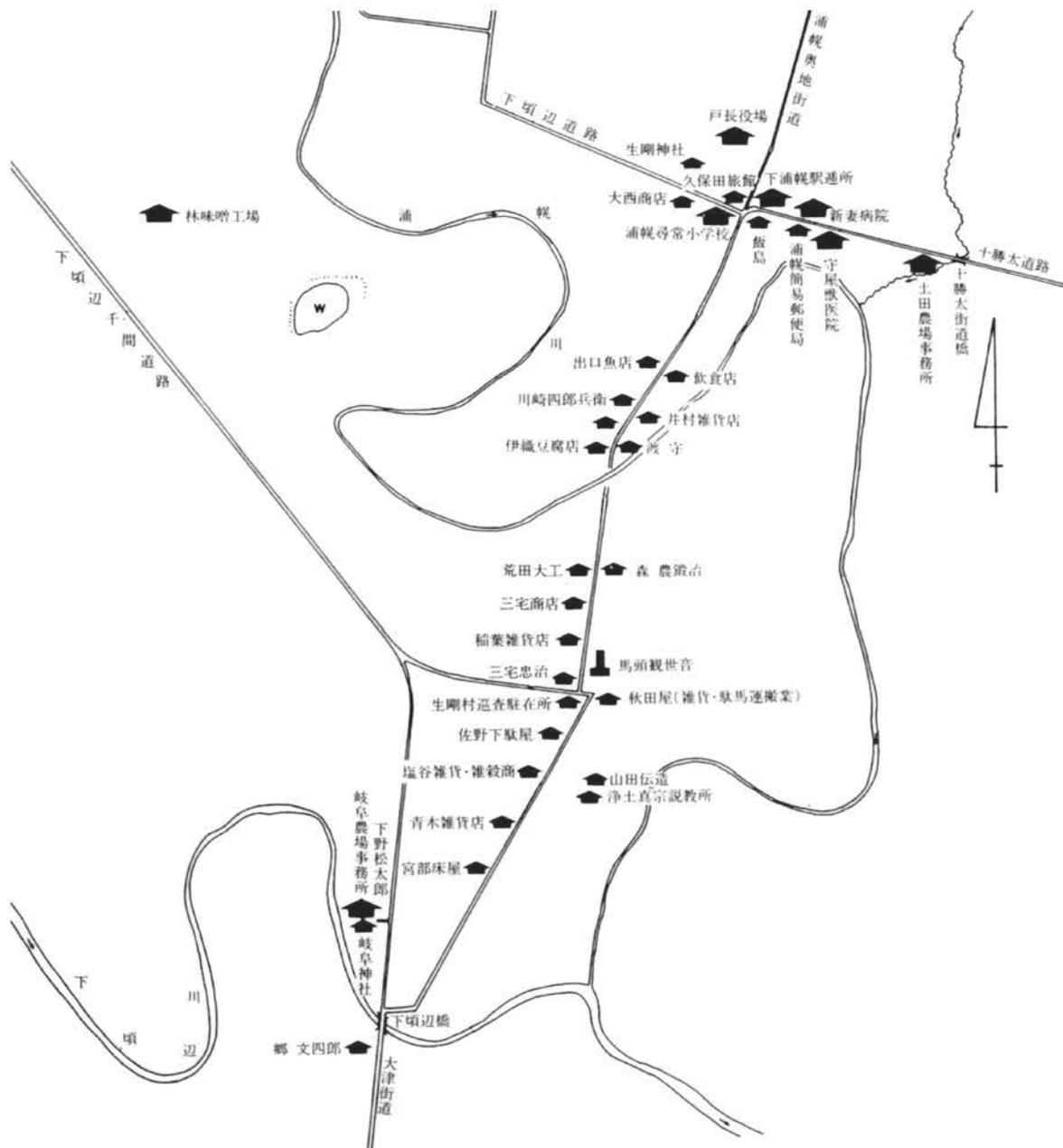


図7 1902（明治35）年頃の生剛市街地（安藤・後藤 1978）

1929(昭和4)年7月4日午前0時15分、松太郎没。

1935(昭和10)年3月、耕作者に解放される。

7. 岐阜農場の所在地

岐阜農場は、下浦幌原野の南部に所在する(図6)。南は浦幌十勝川(旧十勝川)、東は概ね旧浦幌川を境として土田農場に、南部は熊谷農場に接している。西は、旧下頃辺川に跨る範囲で、一部はアイヌ給与地に接し、北は、概ね現在の吉野市街付近までとなっている。

当地は、十勝のゲートウェイとなった大津に近い利便地で、釧路線鉄道の停車場が開業するという期待もあり、岐阜農場事務所や土田農場事務所をはじめ、生剛外二ヶ村戸長役場、浦幌尋常小学校(もとの吉野小学校の前身)、下浦幌駅通所、浦幌郵便局、生剛村巡査駐在所、浄土真宗説教所、守屋獣医院、新妻病院、久保田旅館などが相次いで設置され(安藤・後藤、1978)、市街化した(図7)。

当地区に鉄道が敷設され、停車場が開業するという期待は、例えば「浦幌土田農場概況」中に、「函館より小樽札幌を経て本農場を横断し釧路、根室に達するの官設鉄道は数年ならずして着手さるべく共に皆な既に測定を終はれり」(土田、1896)とあり、小作人募移の重要な要素ともなっていた。

しかしながら、結局、釧路線は厚内から海浜を避けて山中に入り、浦幌、池田を通過することとなったため、この生剛市街地はやがて分解し、浦幌停車場付近と下頃辺(吉野)市街地に移転する。そのためか、吉野市街の現在の国道38号から1本新吉野駅寄りの通り(かつての通学路)は、「^{しものどお}下野通」と呼ばれていた(吉野小学校開校百周年記念事業協賛会記念誌部会編、2000)。

生剛市街地から大津へ赴くためには、当市街地内の旧浦幌川を渡船で渡り、市街地南端の旧下頃辺川の下頃辺橋を通り、十勝川、ウツナイ川、大津川の各渡船を利用することになる(後藤編、2004)。おおよその行程は、6 kmである。したがって、生剛市街地に雑貨店、下駄店、豆腐店、魚店、床屋、味噌工場があったものの、生活必需品の多くは、大津に依存した。この当時の大津港に陸揚げされた「重要品」が『北海道殖民状況報文・十勝国』(河野・一色、1901)に掲載されているが、これによれば、十勝の商人は、函館と

取引をしていたが、呉服・太物類・小間物類は東京と直接取引をしていたという。仕入れされた品目は、米・呉服太物・大麦・酒・蕨・煙草・砂糖・金物類・味噌塩・醤油・小間物・綿などである。

8. 岐阜農場と隣接農場の比較



図8 岐阜農場事務所(北海道庁河西支庁 1911)

岐阜農場(図8)に隣接して、ほぼ同時期に、二つの農場が開かれた。熊谷農場と土田農場である。『北海道殖民状況報文・十勝国』などによれば、この2農場は次のような内容を持った農場であった(河野・一色、1901)。

熊谷農場は、新潟県佐渡国雑太郡畑戸(現佐渡市)出身で、大津で雑貨商・醸造業・漁業などを営んでいた熊谷泰蔵(註5)が、かつて十勝産馬改良組合の牧場だった土地を1890(明治23)年に買収し、1896(明治29)年から開墾を始めたものである。牧場を農地とするため、同年数戸、1897年17戸、1898年2戸を入植させた。当農場の小作人募移は、他農場とは異なり、「一定ノ地ヨリ募集シタルニアラス大津ニ上陸シテ未タ方向ヲ定メサル単独移民ヲ移住セシメタル」という方針で、大津港に上陸したものの未だ入植先の決まっていない者を一本釣りに入植させた。そのため「多少ノ資本ヲ有」しており、他農場の小作人に比して借金も少なく、農耕馬やプラウ・ハローなどの農機具を購入することも可能だった。

土田農場(図9)は、茨城県常陸国筑波郡上郷村大山(現つくば市)の旧家・豪農だった土田謙吉が、1891(明治24)年以来、たびたび渡道し、1895(明治28)年貸付許可を受けた土地で、1896(明治29)年茨城県から数戸を入植させた。小作人は主に茨城県

	岐 阜 農 場	熊 谷 農 場	土 田 農 場
農 場 主	大野亀三郎	熊谷泰蔵	土田謙吉
管 理 人	下野松太郎	松平禧太郎・中川北松	土田庫吉
歴代事務員	下野竹夫・横山友九郎・河合亀吉		飯島広吉・川眞田清六
農場面積	299 万余坪	26 万余坪	300 万余坪
土地配当	5 町歩	5 町歩	4 町 5 反歩
1 反歩当りの開墾料	樹林地 2 円 草原地は、プラウ・ハローを使用して 50 銭	1 円	1 ～ 1 円 50 銭
鋤下年期	3 年	4 年	2 年
小 作 料	4 年目 1 反 50 銭 5 年目 1 反 75 銭 6 年目 1 反 1 円	4 年目以降に決定	3 年目 1 反 50 銭 4 年目以降漸次増額
開墾方法	13 戸が馬 1 ～ 5 頭飼養。プラウ・ハロー所有者 5 戸。別に農場事務所で馬 9 頭飼養。	数戸は、プラウ・ハローによる馬耕	鋤のみ
小作人の農場からの借金	1 戸平均 120 円		1 戸平均 253 円
小作人の資質		多少の資本を有する者が多い	知識低く前後の思慮に乏しく、妄りに負債を重ねる
小作人の出身県	岐阜・富山・石川など	行先未定の者を大津で勧誘	富山・石川、少数の茨城・徳島・山形
開墾地の土壌等	地味肥沃であるが、泥炭性湿地もある	膏腴な沖積土で草原地多い。樹林地・湿地少々	樹林地・草原地と多少の湿地、概して肥沃
現品貸付品	食料・農具・種子・家具等		渡航費・食料費
小屋掛料	7 円支給（3 ～ 5 年賦で返済）		必要品を給与

表1 『北海道殖民状況報文・十勝国』に見る岐阜農場、熊谷農場、土田農場の比較表

人を入植させた。しかし、余り好成績を収めることができなかつたので、農場管理人土田庫吉の依頼を受けた農事指導者兼測量士の君貞次が、1897（明治30）



図9 土田農場事務所（土田右馬太郎先生伝記刊行会編 1958）

年から91戸・800余人（『土田右馬太郎先生伝』では、125戸・805人）を入植させて、開墾を本格化させた。

表1は、『北海道殖民状況報文・十勝国』に記述された生剛村下浦幌原野の3農場の概要を表化したものである。

これらの3農場はいずれも、十勝川・浦幌川・下頃辺川の下流域に所在し、ほとんどが平坦地であったため、開墾は比較的容易であったが、たびたび洪水に襲われたほか、ガスと呼ばれた海霧に悩まされ、経営も不安定となり、岐阜農場は1925（大正14）年8月2日蘇原銀行、熊谷農場は1904（明治37）年3月19日函館区幸町石垣秀助、土田農場は1908（明治41）年11月23日北門興業合資会社にそれぞれ譲渡された。

農場事務員は、岐阜農場の場合、河合亀吉が1896（明

治29)年(北海道庁第五部、1908)、横山友九郎が1897年(渡辺、1926)、下野竹夫が1900(明治33)年の農場入りである。河合は、幌向原野の岐阜殖民社農場から、他の二人は岐阜県からの赴任である。熊谷農場の事務員は明らかではないが、おそらくは農場事務の一切は、大津の熊谷商店で行っていたのではないかと推察される。土田農場の事務員は二人の名前が知られているが、『浦幌村五十年沿革史』によれば川真田清六は、1896(明治29)年の農場入りらしいが、もう一人の飯島広吉については明らかではない。

小作人に対する土地配当は、入植する土地の自然条件によっても異なるが、一般に5町歩を配当する。この表では、土田農場が4町5反で、5反少ない配当であるが、近隣では、洞寒村の池田農場は3町(その後2町)、勇足村・押帯村・幌蓋村に跨る勇足農場(利別農場)や音更村の千野農場は5町以内という具合であった。

1反歩当りの開墾料も、自然条件に左右される項目である。草原地のように樹木が無く、かつ馬耕が行える状況であると低金額となる。これに対して、大木が密生しているような樹林地は高金額となる。鋤下年季もこの期間に連動する事項であるが、土田農場の2年というのは、いかにも短い。もっとも、池田農場は1年である。熊谷農場の鋤下年季は4年であるが、鋤下年季修了後の小作料は「4年目以降に決定」となっていて、入植時には小作料がいくらなのかは明らかではなかった。熊谷農場の場合、オーナーと小作人の口約束が多かったと言われている。

3農場の開墾方法には大きな差異がある。これは農場主の考え方や小作人の経済力など種々の要因が複合的に重なっていたものと思われる。岐阜農場・熊谷農場には馬を飼養している者、プラウやハローを有している者がいるが、土田農場は皆無で、鋤のみの開墾であった。資力があると、馬やプラウを所有している者に依頼をして耕起作業を行うことも可能であったが、少なくとも初期にはそれもできなかったようである。

もっとも、3農場とも経営が安定的であったわけではなく、納税にも苦労した。

当時の納税は、納税義務者が所得の申告書を税務署に提出すると、税務署は所得の調査を行い、その調査書を所得調査委員会へ送付する。所得調査委員会は、所得申告書提出者の中から選挙された委員により構成された委員会で、税務署作成の調査書と納税義務者の申告書をもとに意見を述べ、税務署はこの意見をもと

に所得金額と税額を決定する。税額に不服がある場合は、20日以内であれば審査を求めることができた。納税義務者からの審査請求は、収税官吏と所得調査委員会によって構成された審査委員会が審査した。図示した「取得決定ニ対スル審査要求書」(図10)は、土田農場が1904(明治37)年9月10日に審査要求したもので、別紙理由書には概ね次のようなことが記されている。

土田農場は、1895(明治29)年に開墾地の貸付許可を受け、明治30年に小作人を募集して開墾に着手した。小作人の旅費と食費は農場が負担することになっており、食費は無利子で2年間貸与後、3年目から4年払いで返納することになっている。ところが、1898(明治31)年に発生した大洪水が災いし、開墾を予定どおり行えなくなった。その結果、小作人は食費などの返済が明治37年現在まで滞っている。開墾できた農地も瘦地で、穀物を植えても1反当り僅か1斗2升~2斗の収穫しかなく、赤字続きだった。明治37年からは多少の小作料を見込めるようになったが、徴収できる金額はごく僅かで、滞納もあり、実際の収入は1,500円に過ぎない。この収入から事務所経費を差し引くと残りは僅かで、現在の小作料収入だけでは

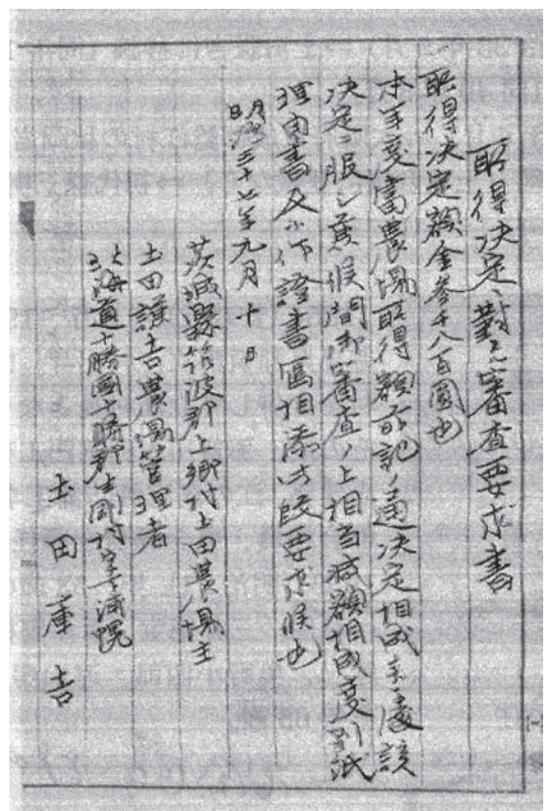


図10 取得決定ニ対スル審査要求書

農場の維持費にも不足が生じる。所有している牛・馬の収入を計上しても少額であり、今回決定された所得金額には納得できない。

以上のように、1898（明治31）年9月の十勝川の未曾有の大洪水の影響は、1904年に至っても大きく影を落としていた。この状況は、他の2農場も同じであったろう。また、農場にとって旅費や食費を支給す

ることも大きな負担となっていた。十勝川下流域に所在していたこれらの農場が、同河川の度重なる洪水や小作人に対する給付が重荷となり、長く存続することが事実上できなかった。小作人も苦しかったが、オーナー側も苦しかったのである。この理由書には書かれていないが、当地域は冷害などによる凶作年も多く、好転する機会がなかなか巡って来ないという状況が窺

町村	年	菜豆類	豌豆類	大豆類	燕 麦	小 豆	その他麦類
屈 足	大正6年	365	274	1,256	368	385	226
	大正5年	315	164	956	305	272	231
	対 比	50	110	300	63	113	△5
人 舞	大正6年	4,000	1,000	400	350	900	200
	大正5年	1,672	177	2,200	663	510	613
	対 比	2,328	823	△1,800	△313	390	△413
芽 室	大正6年	6,500	1,440	1,800	950	1,600	360
	大正5年	1,956	499	3,694	622	1,547	197
	対 比	5,544	941	△1,894	328	53	163
帯 広	大正6年	795	97	139	168	288	70
	大正5年	244	48	343	140	177	169
	対 比	551	49	△204	28	111	△99
大 正	大正6年	2,486	1,270	2,352	395	715	198
	大正5年	1,095	606	2,845	525	355	194
	対 比	1,391	664	△493	△130	360	4
音 更	大正6年	2,856	379	3,753	1,867	738	1,035
	大正5年	1,433	184	4,826	1,700	1,164	1,270
	対 比	1,423	95	△1,073	167	△426	△235
幕 別	大正6年	2,012	801	2,029	558	1,478	411
	大正5年	536	145	2,727	558	1,730	379
	対 比	1,476	656	△698	0	△252	31
川 合	大正6年	450	75	1,500	600	2,000	100
	大正5年	112	37	3,025	685	685	228
	対 比	338	38	△1,525	△85	1,315	△128
本 別	大正6年	1,325	131	2,012	307	899	200
	大正5年	209	65	2,793	250	1,108	200
	対 比	1,116	66	△781	57	△209	0
豊 頃	大正6年	44	20	2,000	450	270	50
	大正5年	39	9	2,478	450	215	62
	対 比	5	11	△478	0	55	△12
浦 幌	大正6年	167	133	1,540	448	767	138
	大正5年	58	46	1,811	488	578	98
	対 比	109	87	△271	△40	189	40
大 津	大正6年	30	17	370	225	30	25
	大正5年	28	15	354	224	29	29
	対 比	2	2	16	1	1	△4
茂 寄	大正6年	20	20	2,150	589	100	85
	大正5年	19	18	2,025	415	98	74
	対 比	1	2	125	174	2	11
計	大正6年	21,050	5,657	21,301	7,275	10,170	3,098
	大正5年	7,716	2,113	30,075	7,025	8,468	3,744
	対 比	13,334	3,544	△8,774	250	1,702	△646

表2 1916（大正5）年と1917（大正6）年の河西支庁管内作物作付反別予想表（北海道庁拓殖部 1917を一部改変）（単位：町歩）

われる。このことは、小作人の農場からの借金額が、岐阜農場120円、土田農場253円という額からも推測される。

9. まとめ

さて、浦幌原野に作付けされていた農作物は、『殖民公報』第40号（北海道庁第五部、1908）によれば、「大豆、燕麦、黍、牧草、藁台等なり」で、このうち販売に供されたのは、大豆3万俵（価格8万4,000円）、黍1,500俵（価格3,150円）、燕麦1,200俵（価格1,440円）、小豆500俵（価格1,350円）、その他菜豆類500俵（価格1,500円）、計9万1,440円である。こうした大豆を主体とした作付け形態は、十勝国全域で言えることで、『殖民公報』第45号にも、「産物は主もに大豆にして食糧として盛に黍を栽培す、大豆を主作する為め耕作極めて単調にして一戸数町乃至十数町歩の大地積を作付するものあり」、続けて「連作の結果次第に害虫の損害増加」と、販売商品として例年大豆を作付けし、その結果として虫害もあることを指摘している（北海道庁第五部、1908c）。

表2は、『殖民公報』第94号に掲載されている1916（大正5）年と1917（大正6）年の河西支庁管内の作付け反別予想である（北海道庁拓殖部、1917）。

この表を見ても、1916年ころの十勝の畑作物の作付けは、菜豆類、豌豆類、大豆類、小豆などの豆類が主力であることは明らかである。しかしながら、菜豆類を見ると人舞村では1916（大正5）年、672町歩だったものが2,328町歩増加して4,000町歩、芽室村では1,956町歩だったものが5,544町歩増加して6,500町歩、大正村では1,045町歩だったものが1,095町歩増加して2,486町歩の作付け予想となっている。同様の状況は、音更村、幕別村、本別村でも見られる。

一方、大豆類の作付けを見ると、人舞村では2,200町歩だったものが1,800町歩減の400町歩、芽室村では3,694町歩だったものが1,894町歩減の1,800町歩、音更村では4,826町歩だったものが1,073町歩減の3,753町歩と軒並み激減している。この傾向は、大津村と茂寄村を除く全町村に見られる。

この原因が、1914（大正3）年7月に勃発した第一次世界大戦による欧州の荒廃によるものであることに論を待たないが、十勝農業史上欠くことのできない事件として語り継がれている、いわゆる「豆成金」の

出現となった。この結果、十勝の農家は現金を手にして、入植以来の負債を一気に返済し、仕込商人から脱却することもできた。

また、帯広の人口も1万人を超え、第一次世界大戦を契機とした未曾有の好景気は、十勝の農村を一変させた。

しかしながら、この表を仔細に、特に、浦幌村（旧生剛村）や大津村の数字を見ると様相は異なる。他町村では、「大豆から菜豆」という作付け変化が顕著なものに対し、浦幌村の菜豆類作付けは、58町歩だったものが109町歩増加して167町歩、大津村は28町歩だったものが2町歩増加して30町歩という僅かな増加にとどまっている。この増加量は、人舞、音更、芽室、大正、幕別、本別などの各村と桁外れの違いである。

また、大豆は、浦幌村では1,811町歩だったものが271町歩減の1,540町歩と微減であるが、大津村や茂寄村ではむしろ増加している。

つまり、浦幌、大津、茂寄の3村は、作物の転換に極めて消極的であった。人舞村や音更村などは、時局の推移を適切に判断し、それに見合う商品作物、輸出作物に上手に転換していったのに対して、欧州の時局を見誤った、あるいは過小評価した可能性がある。

結局、岐阜農場開設当初からの課題であった地勢的課題、すなわち、頻繁に起きる十勝川・浦幌川・下頃辺川の洪水、慢性的な水霧（ガス）による低温・日照不足、泥炭性湿地という問題に加え、第一次世界大戦時の作付け対応が、本農場が幕を閉じる原因となったのではないとも考えている。

註

註1 初代齋藤兵太郎の嫡孫で、厚内に居住していた齋藤兵一郎から、松太郎がたびたび列車で齋藤家を訪れ、初代兵太郎とお互いに法螺を吹きながら碁を打っていたこと、兵太郎と顔が似ており、たびたび来訪するので、この二人は兄弟に違いないと思ったという話を聞いたことがある。兵一郎は、馬産家、日本刀の鑑定家、コレクターとしても知られていた。

註2 二人のつきあいは、1891（明治24）年ころからであるが、「身分が違う」と強く反対されていた。つるの実家の土井家は、岐阜県稲葉郡岩村大字岩田16番戸に在ったが、その後、中川郡豊頃村に

入植した。

註3 菅野光民が正しい。小樽新聞帯広支局長だったが、1912（大正元）年、独立して十勝日日新聞を創刊した。1916（大正5）年、トムラウシで観光資源調査中にヒグマに襲われ、非業の死を遂げた。

註4 後藤仙桂は、岐阜県武儀郡小金田村上白金の後藤左右衛門、らくの四男で、幼名は金次郎。1901（明治34）年12月24日、出家して仙桂と改名し、名古屋市秋葉山円通寺に入るも還俗。長兄貞吉が団体長を務め、1906（明治39）年4月空知郡上富良野村江幌に入植した岐阜団体（25戸）に合流した。仙桂の妻は戸籍上では、松太郎の妻つる妹となっているが、実際は松太郎の長女で、そのことは、子息や岐阜農場関係者も知っていた。名前は、戸籍上では変体仮名で、「後藤家過去帳」では「志津起」、古い写真アルバムには「静枝」と記載されているものもある。仙桂は、後年、上富良野村に残るか、岳父松太郎のいる生剛村の岐阜農場入りするか選択を任されたが、生剛村入りし、松太郎没後は実質の後継者となった。長兄貞吉は、1926（大正15）年5月24日の十勝岳大爆発の影響もあり、郷里岐阜県小金田村上白金に戻った。

註5 熊谷泰蔵の表記は、『北海立志図録』では「熊谷泰蔵」、『北海道殖民状況報文・十勝国』では「熊谷泰造」とあり、『豊頃町史』では、併用されている。ここでは、最も古い表記である「熊谷泰蔵」をとった。

引用文献

芥見郷土誌編纂委員会編. 1961. 芥見郷土誌. 岐阜市芥見公民館, 岐阜.
 安藤龍逸・後藤秀彦. 1978. 生剛村旧市街の街並み形成について. 浦幌町郷土博物館報告12:
 稲童丸謙二. 1964. 栗沢町史. 空知郡栗沢町役場, 栗沢
 大堀一志. 2019. 各務用水物語—永遠の水6—. マイ広報紙2019年6月15日号. 広報各務原, 各務原.
 音更町史編さん委員会編. 1980. 音更町史所収「移住の沿革」. 音更町, 音更.

神埜努. 1995. 柳本通義の生涯—クラークの直弟子札幌農学校第一期生—. 共同文化社, 札幌.
 岐阜県編. 1980. 岐阜県史通史編（近代上）. 合名会社大衆書房, 岐阜.
 岐阜県歴史資料保存協会編. 1998. 飛騨・美濃合併120周年記念事業誌「大志を抱いた人びと—岐阜県人の北海道開拓物語—. 岐阜県, 岐阜.
 河野常吉・一色藤之助. 1901. 北海道殖民状況報文・十勝国. 北海道庁殖民部拓殖課, 札幌.
 児玉九峯・藤田桜鉄. 1894. 濃飛名譽人物評（下）. 濃飛名譽会, 岐阜.
 後藤秀彦編. 2004. 濤標—十勝川の川舟文化史—. 十勝川川舟文化史「濤標」刊行会, 帯広.
 土田右馬太郎先生伝記刊行会編. 1958. 土田右馬太郎先生伝. 土田右馬太郎先生伝記刊行会, 豊里.
 土田謙吉. 1896. 十勝国浦幌土田農場概況小作人規定及移民心得. 私家版, 上郷.
 中村英重. 1998. 北海道移住の軌跡—移住史への旅—. 高志書院, 東京.
 古川忠一郎. 1926. 東北海道人物画伝第壹巻. 東北海道人物画伝発行会, 釧路.
 北海道議会事務局編. 1955. 北海道議会史2. 北海道議会事務局, 札幌.
 北海道庁河西支庁. 1911. 十勝国産業写真帖. 河西支庁, 帯広.
 北海道庁殖民部拓殖課編. 1905. 各県移住民の概況（其一）. 殖民公報, 24. 北海道協会支部, 札幌.
 北海道庁第五部. 1908a. 移住者成績調査第二編. 北海道協会支部, 札幌.
 北海道庁第五部. 1908b. 浦幌原野の概況. 殖民公報, 40. 北海道協会支部, 札幌
 北海道庁第五部. 1908c. 本道各地農業の概況. 殖民公報, 45. 北海道協会支部, 札幌.
 北海道庁第二部殖民課. 1891. 北海道殖民地撰定報文. 北海道庁第二部殖民課, 札幌.
 北海道庁拓殖部. 1917. 河西支庁管内本年作付反別予想. 殖民公報, 94. 北海道協会支部, 札幌.
 間宮不二雄. 1949. 浦幌村五十年沿革史. 浦幌村役場, 浦幌
 森直樹. 1943. 郷土の温故. 私家版, 浦幌
 安田巖城著・後藤秀彦校註. 2020. 詳解十勝史. ふるさと十勝, 帯広
 吉野小学校開校百周年記念事業協賛会記念誌部会編. 2000. 飛翔—吉野小学校開校百周年記念誌—. 1.

吉野小学校開校百周年記念事業協賛会，浦幌。

陸別町役場広報広聴町史編さん室編．1994．陸別町
史通史編．陸別町，陸別。

渡辺諤堂．1926．東北海道の人物．釧路日日新聞社，
釧路。

採集記録・観察記録

オオモンシロチョウが再発生

円子紳一¹⁾

Shinichi MARUKO, 2021. Recent Occurrences of *Pieris brassicae*
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 21: 33-34.

町内でのオオモンシロチョウ *Pieris brassicae* (Linnaeus, 1758) の最初の採集確認は、帯広百年記念館が所蔵する阿部秀夫氏（浦幌町）の1999年9月10日・帯富（浦幌高校グラウンド）での記録と思われる（伊藤 2017）。また、上野雅史氏（利尻町）が同年8月28日に帯富71-4で、ワサビダイコンに食痕と脱皮殻を確認している（上野 2001）。

2000年5月31日に帯富で円子が（円子 2013）、以降12年まで荒川和子氏、立浪みつ子氏、東等義光氏らによって確認されていた（荒川2001, 2002, 2003, 2004, 2005, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010, 2011, 2012, 2013, 2014, 2015, 2016, 2017, 2018, 2019, 2020）。

13年以降はぱったりと姿を見せなくなっていた。円子は、20年7月20日と24日（豊北）、9月17日（帯富）に採集した（図1）。浦幌での確認は8年ぶりである。

また、荒川氏は7月29日と8月7日（相川）、8月13日（南町）、9月9日と21日（相川）に採集している。

本種はヨーロッパ原産の外来種で、ロシア南東部のウラジオストック周辺では1995年頃から普通種となっていた。北海道では1995年に京極町で初確認された。十勝では1998年に新得町と広尾町で確認され、その後、十勝全域に分布を拡大したと思われる。

食草はアブラナ科で、我が家の家庭菜園でも一時は大発生したが、2012年以降になると全道的に減少傾向になった。要因としては、①本種の幼虫が高湿度に極端に弱い②農薬に対する抵抗性が弱い③終齢幼虫へのコマユバチの寄生などが考えられている。

20年の我が家の家庭菜園では、8月28日に多数の幼虫がヤマワサビ（ホースラディッシュ）の葉を食べているのを発見した（図2）。数匹の終齢幼虫にはアオムシコマユバチと思われる寄生蜂が見られた。

なお、中川郁子氏（浦幌町字美園）によると、07

年頃～19年まで庭先に訪れる本種を確認しているという。農薬を使わない家庭菜園や山地などで秘かに生きのびていると思われ、今後の発生を注視したい。

本稿の作成に当たってご教示いただいた荒川和子氏、中川郁子氏、浦幌町立博物館の持田誠学芸員、帯広百年記念館の伊藤彩子学芸員に感謝申し上げる。

参考文献

- 上野雅史. 2001. オオモンシロチョウについての一考察（第5報）. やどりが. 189号. 14-19.
- 白水隆. 2011. 日本産蝶類標準図鑑（第3刷）. 学研教育出版, 東京.
- 伊藤彩子. 2017. 阿部英夫氏チョウ目標本コレクション目録. 帯広百年記念館紀要. 第35号. 47-56.
- 永盛俊行・永盛拓行・芝田翼・黒田哲・石黒誠. 2018, 完本 北海道蝶類図鑑（第2刷）, 北海道大学出版会, 札幌.
- 円子紳一. 2013. 浦幌町の外来種を考える. 浦幌町立博物館紀要. 13: 7-14.
- 荒川和子. 2001. 浦幌町立博物館所蔵の2000年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 創刊号: 43-54.
- 荒川和子. 2002. 浦幌町立博物館所蔵の2001年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 2: 1-2.
- 荒川和子. 2003. 浦幌町立博物館所蔵の2002年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 3: 1-5.
- 荒川和子. 2004. 浦幌町立博物館所蔵の2003年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 4: 1-4.
- 荒川和子. 2005. 浦幌町立博物館所蔵の2004年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 5: 1-9.
- 荒川和子. 2006. 浦幌町立博物館所蔵の2005年度採

1) 浦幌の自然を楽しむ会 〒089-5634 北海道十勝郡浦幌町字帯富

- 集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 6:1-7.
荒川和子. 2007. 浦幌町立博物館所蔵の2006年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 7:1-19.
荒川和子. 2008. 浦幌町立博物館所蔵の2007年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 8:1-9.
荒川和子. 2009. 浦幌町立博物館所蔵の2008年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 9:1-8.
荒川和子. 2010. 浦幌町立博物館所蔵の2009年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 10:1-8.
荒川和子. 2011. 浦幌町立博物館所蔵の2010年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 11:1-9.
荒川和子. 2012. 浦幌町立博物館所蔵の2011年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 12:1-5.
荒川和子. 2013. 浦幌町立博物館所蔵の2012年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 13:1-5.

- 荒川和子. 2014. 浦幌町立博物館所蔵の2013年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 14:1-5.
荒川和子. 2015. 浦幌町立博物館所蔵の2014年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 15:1-7.
荒川和子. 2016. 浦幌町立博物館所蔵の2015年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 16:1-7.
荒川和子. 2017. 浦幌町立博物館所蔵の2016年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 17:1-7.
荒川和子. 2018. 浦幌町立博物館所蔵の2017年度収蔵の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 18:1-14.
荒川和子. 2019. 浦幌町立博物館所蔵の2018年度収蔵の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 19:1-7.
荒川和子. 2020. 浦幌町立博物館所蔵の2019年度採集の蝶標本. 浦幌町立博物館紀要. 20:1-7.



図1 豊北で7月20日に採集されたオオモンシロチョウ



図2 オオモンシロチョウ幼虫

採集記録・観察記録

浦幌のウチダザリガニ駆除（2020年）

円子紳一¹⁾

Shinichi MARUKO, 2021. The extermination of *Pacifastacus luniusculus trowbridgii* in Urahoro, eastern Hokkaido, 2020
Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 21:35.

「浦幌の自然を楽しむ会」によるウチダザリガニ駆除は6年を経過した。この間、2015年から20年までに59回の捕獲作業で3,627匹を駆除した（円子2016, 2017, 2018, 2020）。浦幌川本流で150匹、オベトン川で1,384匹、旧オベトン川で2,093匹だった。

20年は、浦幌川でカニカゴととも網1回、オベトン川でとも網2回、旧オベトン川でとも網2回の駆除作業を行った。7月26日のウチダザリガニ バスターズは、園児1人と小学生3人、大人5人の計9人の参加を得て行われた。例年実施していた酪農学園大学野生動物保全技術実習は、新型コロナウイルス感染症防止対策のため中止を余儀なくされた。

7月5日には浦幌川の円山地区でとも網で6匹捕獲し、生息域の拡大が確認された。計測はしなかったものの、3cm程度の小さな個体もいたので、周辺で繁殖しているものと思われる。

全体では駆除回数が5回と過去最少だったのに対して、捕獲数が1,297匹と過去最多となった。一番の要因は旧オベトン川での大繁殖があげられる。2回で、592匹、458匹の計1,050匹にもなった。捕獲場所は旧オベトン川に架かる「森林公園橋」の上流で、森林公園を流れる「宮の沢川」が合流する地点だ。浦幌町立博物館紀要第20号に「ここにはガマが生育していて根元は格好の棲みかとなっていると思われる」と記したが、ガマ科のミクリ（準絶滅危惧種）と判明した。

浦幌町に特定外来生物のウチダザリガニが生息していることを子どもたちに伝える「ウチダザリガニ バスターズ」を2016年から行っているが、これからも継続することで子どもたちに浦幌の自然の一端を知ってもらいたいと思う。

町内の河川でのウチダザリガニによる被害などは確認できていないが、ニホンザリガニとの接触が憂慮さ

れることから、小さな活動であるが引き続き駆除活動を進めて行きたい。

駆除活動の中心となっている「浦幌の自然を楽しむ会」のみなさん、町立博物館の持田誠学芸員、「ウチダザリガニ バスターズ」に参加いただいたみなさんに心から感謝申し上げる。

引用文献

- 円子紳一. 2016. 浦幌で初めてのウチダザリガニ駆除. 浦幌町立博物館紀要. 16: 9-13.
 円子紳一. 2017. 浦幌のウチダザリガニ駆除（2016年）. 浦幌町立博物館紀要. 17: 9-11.
 円子紳一. 2018. 浦幌のウチダザリガニ駆除（2017年）. 浦幌町立博物館紀要. 18: 15-18.
 円子紳一. 2020. 浦幌のウチダザリガニ駆除（2018・2019年）. 浦幌町立博物館紀要. 20: 31-32.

浦幌町での捕獲数の推移

捕獲年	捕 獲 数			
	合 計	浦幌川	オベトン川	旧オベトン川
2015年	111	93	18	
2016年	200	15	185	
2017年	292	4	288	
2018年	1,186	0	412	774
2019年	541	29	243	269
2020年	1,297	9	238	1,050
計	3,627	150	1,384	2,093

1) 浦幌の自然を楽しむ会 〒089-5634 北海道十勝郡浦幌町字帯富

採集記録・観察記録

アサギマダラを確認

円子紳一¹⁾

Shinichi MARUKO, 2021. Confirmation record of *Parantica sita*

Bulletin of the Historical Museum of Urahoro, 21:36.

2020年7月6日、浦幌町帯富（北栄団地）でアサギマダラ *Parantica sita* (Kollar, 1844) を採集した。町内での採集は、1980年6月1日の2頭（万年、活平）以来で40年ぶりである（円子 1980）。2017年9月9日には、町東山で写真撮影されている（円子 2018）。

7月6日午前10時頃、家庭菜園の横に咲く外来種のコウリントンポポ（赤花）にふわりと舞い降りた。捕獲する用具を持ち合わせていなかったため、素手で捕まえようとも考えたが、逃がす訳にはいかないと思い直した。数十メートル離れた我が家に駆け戻り捕虫網を手に戻ると、幸運にも近くの道路脇に居てくれた。

本種の成虫の前翅長（ぜんしちょう＝前翅の根本から先端までの長さ）は5～6センチほどで、採集した個体は5.4センチだった。前翅の半透明の水色部分や後翅の斑点の「浅葱（あさぎ）」色が名前の由来。

以前は、日本で幼虫が越冬できる北限は食草キョラン（ガガイモ科）の分布にほぼ一致していて、関東あたりまでといわれていた（白水 2011）。1980年以前はめったに見られなかったが、2000年以降、室蘭市や函館市周辺、松前町などでは、ほぼ毎年見られるようになった。近年は道内各地で記録され、日高山脈の東側では中札内村や大樹町に記録が多いとされている（永盛ほか 2018）。

道内での食草としては、イケマ（ガガイモ科）が確認されている。イケマは浦幌にも各地に生育しているので、地球温暖化の進行により発生する日が来るかも知れない。

引用文献

- 白水隆. 2011. 日本産蝶類標準図鑑（第3刷）. 学研教育出版, 東京.
- 永盛俊行・永盛拓行・芝田翼・黒田哲・石黒誠. 2018. 完本 北海道蝶類図鑑（第2刷）. 北海道大学出版会, 札幌.
- 円子紳一. 1980. アサギマダラ2頭を採集. 浦幌町立郷土博物館報告, 16: 24.
- 円子紳一. 2018. 37年ぶりにアサギマダラを確認. 浦幌町立博物館紀要, 18: 41.



図1 2020年に浦幌町帯富で採集されたアサギマダラ

1) 浦幌の自然を楽しむ会 〒089-5634 北海道十勝郡浦幌町字帯富

票

本年九月左記要領ニヨリ奉天ニ於テ全国小学校長會議開催致度ニ
付出席方南滿州鉄道株式会社長ヨリ依頼越候条貴部内各小學校ニ
周知ノ上希望ノ者ハ本月末日マテ職氏名御回報相成度

全国小学校長會議並滿州朝鮮視察要項

枠は朱欄外

第 一 二 五 號

○ 會 議

一、開催地 奉天 二、会場 奉天尋常高等小学校

三、期 日 大正十五年九月中旬ノ一日

四、参加者資格 地方長官ノ推薦ニ係ル一府懸五名以内、小学校
長及在滿州各小学校長（北海道、樺太、朝鮮及台湾ハ便宜上
一府懸ニ準シタシ但シ一府懸ヨリ場合ニヨリテ五名以上選択
スル事アルベシ）

五、準備其ノ他 會場ノ設備議案ノ作成其ノ他本會議ニ關スル準
備ハ當社学務課及本件為メ特ニ当社ヨリ特ニ委嘱シタル在滿
小学校長中ノ委員ニ於テ處理シ之ニ要スル費用ハ當社ニ於テ
負担ス

○ 視 察

一、実施期 奉天九月上旬釜山出發同下旬下関帰着ノ豫定トシ其
確定期日ハ追テ通知スベシ

二、團體組織ト旅行日程 団体組織ノ方法ニ就テハ當社ニ一任セ
ラレタシ 旅行日程ハ大様左記ノ豫定ニ依ルベキモ其実行日
程ハ参加人数ノ多少列車關係等顧慮シ作成ノ上団体編別ノ通
知ト共ニ送付スベシ

三、當社ノ待遇方法

- (1) 滿朝視察中ハ社員二名 案内者三名ヲ付ス
- (2) 朝鮮係及當社係内団体旅行中ハ式等用車ヲ聯結シ其乗車
賃金及客車聯結料ハ當車ニ於テ負担ス（団体ヲ□シタル場合
ハ無賃乗車ノ取扱ハ難相成ニ付参加者ハ學校教員乗車割引充
當）
- (3) 奉天、撫順及長春、ハルピン及大連ニ於ル団体トシテノ
視察用車馬賃ハ當社負担トス

四、旅館

- (1) 滿鮮各地旅館中ニハ女設備不完全ナルモノモアリ且ツ大
團體ノコトナルヲ以テ各自満足ヲ期セラル、事不可能ナリ
- (2) 各地ニ知古、親戚等ノ許ニ啓宿セラル、場合ハ二日前ニ
當車案内係ニ申出ラル、事

五、其他

- (1) 服装及携帶品九月上旬乃至十月上旬迄服装ハ間服ニテ可
ナルベシ但シ九月下旬ニ至レハ夜分粹氣温ノ低下スルコトモ
アリ又日中ト虽モ日ニヨリ寒暖アルヲ以テ旅行用毛布及冬
シャツヲ用意セラル、必要アルベシ当秋季ハ降雨少ナキヲ以
テ蝙蝠傘ハ殆ト必要ナシ
- (2) 滿鮮以外ノ旅行 滿鮮視察後北京天津及山東方面視察セ
ラル、ヤ否ヤハ別紙會議参加申込書ノ旅行種別欄ニ明記サラ

記

金拾参円 特別教育規程ニ依ル尋常小學校及特別教授場
經費補助

右謄本也

大正十五年三月四日

十勝郡浦幌村長 石原 重方

教第一二三號

⑨

大正十五年二月十八日

河西支廳長 那須 正夫

〔浦幌^(加筆)村長 殿〕

割印^(欄外)

特別教育規程ニ依ル尋常小學校及特別教授場其ノ他經費補助ノ件

今般貴部内特別教育規程ニ依ル尋常小學校及特別教授場經費補助
トシテ北海道方費ヨリ別紙ノ通り義指令相成候条指令謄本ヲ添へ
支廳長宛請求書式通調製提出相成度此段及通牒候也

内教第四二六號

〔十勝^(加筆)〕郡〔浦幌^(加筆)〕村

大正十四年度其ノ村教育費ニ對シ左ノ通補助ス

大正十五年二月十五日

北海道廳長官 中川 健藏

北海道
廳長官
之印

記

金〔参拾^(加筆)〕円 特別教育規程ニ依ル尋常小學校及
特別教授場經費補助

⑨

教第二〇六號

大正十五年三月十五日

河西支廳長 那須 正夫

各町 村長 殿

全国小学校長會議開催ノ件

結 完^(欄外)

決裁印完票

浦第五五〇號

大正十五年三月四日

河西支廳長 那須 正夫 殿

浦幌村長 石原 重方

〔大正十五年三月四日〕

特別教育規程ニ依ル尋常小学校及特別教授場其ノ他經費補助ノ件

教第一二三號ヲ以テ御通牒有之候前件別紙ノ通り及提出致候條可然御取計相成度候也

大正十五年三月二十五日収入済

決済印

村長	首席	合議	主任	任主
印				印

完結票

村長	首席	主任	施行	完結
印	印	印	済	

枠は未欄外

第一二四號

一、金拾參圓也

請求書

右及請求候也

大正十五年三月四日

河西支廳長 那須 正夫 殿

十勝郡浦幌村長 石原 重方

内教第四二六號

十勝郡浦幌村

大正十四年度其ノ村教育費ニ対シ左ノ通補助ス

大正十五年二月十五日

北海道廳長官 中川 健藏

印 (手書き)

決裁印(欄外)

旭商第三二〇號
「浦第三九三號」
「三月四日」
旭商第三二〇號(朱加筆)

大正十五年二月三日

「受付印有」
印(朱加筆)

完決票(欄外)

「各小学校長殿」
印(朱加筆)

入學志願者募集依頼ノ件

本年四月本校へ入學セシムヘキ生徒ハ本月三日北海タイムス、小樽新聞並市内發行ノ日刊新聞へ広告致置候得共別紙各葉御送附申上候間乍御手数數多数志願候様御配慮相煩シ度此段及御依頼候也

追テ入學願書用紙不足ノ場合ハ送付シタル様式ニ準シ調製提出スルモ差支無之候間御含ミ下ラレ度候

「浦幌村長」
旭川商業學校

北海道旭川商業學校之印

第 一 二 三 號
朱 黒 朱
枠は朱欄外

村長	首席	合議	主任
印			印

決済印

村長	首席	主任	施行	完結
印	印	印	済	結

完結票

入學願

保 證 人		本 人		
職 業	住 所	經 歴	住 所	族 籍 戸主トノ關係
本人トノ關係				
生年月日	氏 名		生年月日	氏 名

右御校へ入學志願ニ付御許可被下度此段相願候也

大正 年 月 日

住所 本人
住所 本人
住所 保証人

旭川商業學校長 川合光寛 殿

各町村長 殿

小学校長會議ニ關スル件

本年管内小学校長會議ハ来ル十月上旬ニ開催ノ見込ニ有之候處左記ハ此當日迄調査ノ上文書ヲ以テ答申相成候様貴部内小学校長ニ無洩御示達相成度此段及通牒候也

記

諮問

一、小学校ニ於ケル公民教育ノ實際的方案如何

決(欄外)

時下嚴寒の候益々御清榮の段賀上候、陳は本校新學年度に於て別紙の案内書の通り生徒募集致度候につき御繁忙中恐入候へ共何分の御援助被下成度此段御依頼申上候也

印

追つて別紙ポスターは御手数ながら摘宜御揭示下され度御願申上候

尚ほ序ながら先般十勝毎日紙上に近時本校職員生徒中肺結核患

完(欄外)

者多數ある如き記事有之、世間にも同様の風評あるやに聞き及び候へ共事実と非常に相違し本校にては迷惑致し居候、実は職員には該患者又はそれに類する者一名も無之、生徒中にも該病者は今や全然無之有様に候間御了知の上御吹聴願上度併せて申添候

票

「(欄外)朱文」
「役場前」
「二」
「掲出可然」
「裁」

二月三日

大正十五年二月

帶廣大谷高等女學校長

蕪城 賢順

印

殿

「(紫)スタンプ」
「受付印有」

「(加筆)」
「揭示濟」
「印」

決済印

完結票(縦)

第朱
一一二黒
號朱

枠は朱欄外

任主	議合	席首	長村
印			印

完結	施行濟	主任	首席	村長
		印	印	印

宛名 各小学校長 宛

件名 管内小学校長會議ニ關スル件

管内小学校長會議ハ本月上旬開催見込ノ旨通牒致置候處都合ニ依リ無期延期ト相成候趣其筋トリ通牒有之候條御了知相成候也

追テ開催ノ場合ハ更ニ通知可致尚諮問事項ニハ變更無之候条申添候

教第一、七七〇號

印

〔^(紫スタンプ)受付印有〕

大正十四年十月九日

印

河西支廳長 那須 正夫

各町村長 殿

管内小学校長會議ニ關スル件

標記ノ件ニ關シ本月上旬開催見込ノ旨通牒置候處都合ニヨリ無期延期ニ相成候条右貴部内各小学校長ニ御示達相成様致度此段通牒候也

追テ開催ノ場合ハ更ニ通知可致尚諮問事項ニハ變更無之ニ付申添候也

大正十四年 九月十八日發議 大正 〇年 〇月 〇日議決 大正 〇年 〇月 〇日發送 淨書^印 校合^印

村長 ^印 首席 ^印 合議 主任 發議者

番號 浦第 二、八九八 號 發信者 村長

宛名 各小学校長 宛

件名 管内小学校長會議ニ關スル件

本年管内小学校長會議ハ来ル十月上旬ニ開催ノ見込ノ由ニ候處左記ハ其ノ当日迄ニ調査ノ上文書ヲ以テ答申相成度旨其ノ筋ヨリ通牒有之候条可然御處理相成度及移牒候也

記

諮問

一、小学校ニ於ケル公民教育ノ實際的方案如何

教第一七七〇號 ^印

〔^(紫スタンプ)受付印有〕

大正十四年九月十四日

印

河西支廳長 那須 正夫

二級町村ノ予算編製勤儉週間ノ実施等ヲモ考慮二月ニ繰延タル
義ニ有之候尚會議場所ハ不日決定ノ上更ニ通知可致候条御了知
相成度此段申添候

大正十五年 一月十八日發議 大正 全年 今月 全日議決〔紫スタンプ〕「大正拾五年壹月拾八日發送 淨書[㊟] 校合[㊟]

村長 ㊟ 首席 ㊟ 合議 主任 發議者 ㊟

番號 浦第 一七〇 號 發信者 「浦幌〔印〕村長」

宛名 各小学校長 宛

件名 管内小学校長會議開催ノ件

標記ノ件ニ關シ客年十月十三日浦第二、八九八號ヲ以テ無期ノ延
期旨ノ通牒ノ処来ル二月十四、五日頃開催見込ノ趣ニ候条曩ニ諮
問相成居リ候左記事項ニ対シ本月末日限り答申書提出相成候様致
度及通知候也

追而開催期日確定ノ上更ニ通知可致答申書ハ期日ヲ違ハサル様
直接提出相成度申添候

左記

小学校ニ於ケル公民教育ノ實際的方案

教第一七七〇號 ㊟

「受付印有」〔紫スタンプ〕

大正十五年一月十五日

㊟

河西支廳長 那須 正夫

各町村長 殿

管内小学校長會議ニ關スル件

標記ノ件ニ關シ客年十月十九日教第一七七〇號ヲ以テ無期延期ノ
旨通牒ノ処来タル二月一四、五日頃開催ノ見込ニ候条曩ニ設問致
置候「小学校ニ於ケル公民教育ノ實際的方案」本月末日限り答申
書提出相成候様貴部内各小学校長ニ御示達相成度此段通牒候也

追テ開催期日確定ノ上ハ更ニ通牒致スべく申添相成度

大正十四年 十月十三日發議 大正一四年一〇月一三日議決 大正一四年一〇月一六日發送 淨書[㊟] 校合[㊟]

村長 ㊟ 首席 ㊟ 合議 主任 發議者 ㊟

番號 浦第 二、八九八 號 發信者 村長

枠は朱欄外

第 一 二 一 號

庶第二二三號

大正十五年二月二十四日

河西支廳長 那須 正夫

各町村長 殿

町村長並小學校長會議開催ノ件

本月一日庶第二二三號以テ標記ノ件及通牒置候処開催ノ場所ハ姉妹実科高等女子學校ニ決定候条御了知ノ上各學校長ヘモ此旨御傳達相成度及通牒候也

大正十五年 二月 四日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決「^(紫スタンプ)大正拾五年貳月 四日發送 淨書^(印) 校合^(印)

村長 ^(印) 首席 合議 主任 發議者 ^(印)
番號 浦第 三 六 八 號 發信者 村長

宛 名 各小学校長 宛
件 名 管内小学校長會議開催ノ件

曩ニ御通知致置候管内小学校長會議ハ来ル三月二日午前九時ヨリ二日間卜決定ノ旨其ノ筋ヨリ通知有之候条御參集相成候様致度及通知候也

追而會議場所ハ決定相成次第更ニ通知可致候

庶第二二三號

大正十五年二月一日

河西支廳長 那須 正夫

各町村長 殿

町村長並小學校長會議開催ノ件

来ル三月二日午前九時ヨリ二日間管内町村長並小學校長會議ヲ当中招集候条御參集相成度候也

追テ學校長ヲ当町ニハ貴職ヨリ此旨御示達有之度又會議ハ本月中招集ノ予定ニ有之候ヘ共時恰モ嚴寒ノ候ニ有之候ノミナラス

小學校教科目ニ關スル件

大正七年一月二十九日付第一、五八八號通牒ヲ以テ毎年二月十日迄ニ報告可相成標記ノ件既ニ報告済ノ向モ有之候共從來ノ報告調査ヨリ見ルニ様式區々且不備ノ点等有之照復ニ日數ヲ重ネ其ノ筋ヘ報告上差支不尠候條未報告ノ向ハ通牒例規ヲ熟讀シ尚左記事項參照御調製ノ上右期限ヲ誤ラス報告相成候様特ニ御留意相成度此段及通牒候也

左記

- 一、本表調査ハ大正十四年十二月一日現在ヲ以テ調査スルコト
- 二、名稱欄ハ各學校名ヲ何尋常高等小學校、何尋常小學校、何分教場、何特別教授場ノ順序ニ記載シ何々學校ト略ヘカラス（分教場及特別教授場ハ本校ト分離記載ノコト）尚特別規程ニヨル學校名ノ上ニ△印ヲ附シ區別スヘシ
- 三、加設教科目欄ニハ加設教科目ヲ掲記スルコト（例ヘハ農業、商業、手工業等加設セル教科目ヲ記入ノコト）
- 四、闕除若ハ減縮教科目其ノ時數欄ニハ前同様實際闕除科目或ハ減縮科目ト其ノ時數ヲ記入ノコト（例ヘハ唱歌一時ノ如シ）
- 五、配当教科目ト其時數欄ニハ闕除若ハ減縮ニヨリテ生シタル時數ヲ他教科ニ配当シタル配当教科目ト其ノ時數ヲ掲クヘシ
- 六、甲表ニハ小學校施行規則第四號表乃至第六號表ニヨル學校ヲ記載スヘシ
- 七、乙表ニハ廳令第八十四號ノ各表ニヨル學校ヲ記載スヘシ
- 八、本表ハ教科目ニ対スル基本ナレハ唯單ニ該當事項ナシト報告スルカ如キコトナク必ス學校名ヲ記載シ各欄整理ヲナスヘシ該當事項

ナキ時ハ一印ヲ附スヘシ

大正十五年 二月二七日發議 大正 〃年 〃月 〃日議決〔大正拾五年貳月廿七日發送 淨書 校合〕

番號 浦第 三六八 號 發信者 「村長」
 宛名 各小學校長 宛
 主任 發議者
 合議 主任 發議者

完結票

管内小學校長會議開催ノ件
管内小學校長會議開催ノ場所ハ帶広町姉妹高等女學校ニ決定ノ旨通知有之候條御了知相成度

完結	主任	首席	村長
	施行濟		

第三號表乙

十勝郡浦幌村

名稱	加設科目	關除若ク減縮 教科其時數	配當教科目 卜其時數
浦幌尋常高等小學校	高等科 農業、図畫、家事	高等科男兒農業 二時間減縮	高等科男兒算術 一時間図畫二時間
上浦幌尋常高等小學校	高等科 農業、図畫、家事	全 右	全 右
常室尋常小學校	、	、	、
留真尋常小學校	、	、	、
貴老路尋常小學校	、	、	、
幾千世尋常小學校	、	、	、
川上尋常小學校	、	、	、
川流布尋常小學校	、	、	、
吉野尋常小學校	、	、	、
稻穂尋常小學校	、	、	、
養老尋常小學校	、	、	、
活平尋常小學校	、	、	、
常盤尋常小學校	、	、	、
×上常室尋常小學校	、	、	、
瀨多來特別教授場	、	、	、

×印ハ特別教育規程ニ依リ尋常小學校
尋常小學校入學當時一(時)學期十八時間ニ短縮シタルトキ修身二
時間算術五時間唱歌体操四時間國語七時間(國語三時間減)

第四號表

施設學校名	種類	修業年限	教科目	教授日	教授日數	每週教授時數
浦幌尋常高等 小學校	尋常科女 子補習科	二ケ年	修身 國語 算術 理科 裁縫	小學校ニ 準ス	一 四 一	三 二
	高等科女 子補習科	二ケ年	修身 國語 算術 家事 裁縫	小學校ニ 準ス	一 四 一	三 二

但シ毎年五月ヨリ十二月マテノ間ニ於テ生徒ノ願出ニ依リ一部又ハ全
部ノ生徒ニ対シ四ケ月以内休業ヲ為スコトヲ得

教第九六號

大正十五年二月五日



〔受付印有〕



各町村長殿

河西支廳長 那須 正夫

何町村小學校通學區域面積調

學 校 名	通學區域內面積	備 考
何尋常高等小學校	方里 二、五	最長徑 二里三〇丁 最短徑 一里
何尋常小學校	二、〇	
何校附屬何々分教場	一、五	
何々附屬何特別教授場	一、〇	
何校附屬何々分教場		通學區域ヲ設ケス所屬肩書ノ通り
何々附屬何特別教授場		
何々		

- 注意 一、用紙ハ全野紙ヲ用キルコト
 一、各寸法ハ相違セサルコト
 一、備考ニハ通學區域最長最短徑ヲ紀入スルコト

二寸 一寸

裁 決^(欄外)

大正十五年二月十日

浦第四二四號

〔大正 拾五年貳月拾日〕^(紫スタンプ) 印

印

完^(欄外) 結 票

小學校教科目等二關スル件
 大正七年一月二十九日教第一、五八八號御通牒ニ依ル本件別紙ノ
 通り及報告候也

浦幌村長 石原 重方

河西支廳長 那須 正夫 殿

決濟印

村 長	首 席	合 議	主 任
印			印

完結票

村 長	首 席	主 任	施 行	完 結
印	印	印	濟	結

第 二 〇 號^(朱)

枠は朱欄外

大正十五年 二月 二日發議 大正 年 月 日議決 大正 年 月 日發送 淨書 校合

村長 首席[㊟] 合議 主任 發議者 [㊟]

番號 浦第 二六七 號 發信者 村長

宛名 河西支廳長 宛 「^(朱加筆)廢案」

件名 小学校通學區域内面積其ノ他調査ノ件

客月二十一日付兵第三九號ヲ以テ標記ノ件御通牒有之候處未夕校是等調査ヲ為シタルモノヲ有セサル為到底期間内ニハ提出不可能ニ付予メ御了知置相成度此段相願候也

兵第三九號 [㊟] 「^(紫スタンプ)受付印有」 [㊟]

大正十五年一月二十一日

河西支廳長 那須 正夫
各町村長 殿

小學校通學區域内面積其ノ他調査ノ件

今般一般青少年訓練ニ關スル研究ノ參考資料ト致度趣ヲ以テ其ノ

筋ヨリ照会ニ因リ必要相生シ候ニ付貴部内各小學校分教場及特別教授ノ通學區域内面積及該通學區域ヲ表示シタル圖面(美濃半紙大ノモノ)調査及調製シ各々二通宛本月末日迄當廳ニ到達候様御差出相成度及通牒候也

追テ各小學校分教場及特別教授場ノ通學區域内面積ハ別紙様式ニ依リ調査シ尚左記事項御承知相成度申添候

記

- 一、各通學區生域ハ小學校分教場及特別教授場ノ數ニ應スルモノトス但シ通學區域ヲ定メサル分教場及特別教授場アルトキハ所屬校ヲ明示スルコト
- 二、各通學區域ノ面積ノ合計ト貴村内ノ面積トハ合致スルヲ要ス
- 三、圖面ハ左記各號ヲ具備スルコト

- (イ) 題號「何町村内各小學校分教場及特別教授場通學區域圖」
- (ロ) 方位
- (ハ) 各小學校、分教場又ハ特別教授場ノ位置ヲ示シ各々名稱ヲ附スルコト但シ通學區域多數ニシテ紙面ニ記入スルコト能ハサルトキハ當該位置指呼線ヲ圖外ニ引延ハシ之ヲ記入スルモ可ナリ
- (ニ) 主ナル河川道路及鐵道線路ヲ圖示スルコト
- (ホ) 町村役場位置ヲ圖示スルコト其他參考トナルヘキ家屋物件名稱等ヲ附示スルヲ得ハ可ナリ

小學校通學區域圖



常盤尋常小學校	養老尋常小學校	活平尋常小學校	稲穂尋常小學校	川流布尋常小學校	吉野尋常小學校	川上尋常小學校	幾千世尋常小學校	貴老路尋常小學校	上常室尋常小學校
・四	一・五	一・七	一・六	三・四	一・二	二・〇	二・五	二・二	四・一
〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃	〃 〃
二十四丁 二十丁	一里 一丁 二十九丁	二 一丁 二十四丁	一里 十七丁 三十六丁	一里 九丁 二里 十二丁	一里 十七丁 二十二丁	一里 三十丁 一里 二丁	一里三十四丁 三十三丁	一里 二十丁 三十丁	二里二十九丁 一里 十五丁
							留真尋常小學校付属 瀬多來特別教授場		
							一・五		
							〃 〃	〃 〃	
							二里 十二丁 十七丁		

本年度翻刻を実施した史料に付される番号および件名は左記の通りである。

二〇	小学校科目等二千スル件
二一	管内小学校長会議開催ノ件
二二	大谷高女生徒募集二千スル件
二三	旭川商業学校生徒募集ノ件
二四	特別教育課程ニ依ル尋常学校及特別教授場経費補助ノ件
二五	全国小学校長開催ノ件

完結票

枠は朱欄外
 第^朱一九^黒號^朱

村長^印
 首席^印
 主任^印
 施行濟
 完結

大正十五年 2月 4日發議 大正 年 月 日議決〔紫スタンプ〕
 〔大正 拾五年貳月四日〕發送 淨書^印校合^印

學校名

通學区域内面積

備考

村長^印 首席^印 合議^印 主任^印 發議者

番號 浦第 二六七號 發信者 「村長」^{加申}

宛名 河西支廳長 宛
 件名 小學校通學区域内面積其他調査ノ件

票 客月二十一日兵第三九號ヲ以テ御通牒ノ本件別紙ノ通り及提出候也

浦幌尋常高等小學校	方里一分	最長徑 一里三十二丁 最短徑 三十一丁
上浦幌尋常高等小學校	四・八	二里十九丁 一里二十九丁
常室尋常小學校	一・七	一里三十丁 一里二丁
留真尋常小學校	四・九	三里三丁 一里二十九丁

資料紹介

大正十五年

昭和元年

教育雑件〔その六〕

浦幌村役場

三浦直春・大和田努 解説

本報は、浦幌町立博物館所蔵の「大正十五年 昭和元年 教育雑件」(浦幌村役場) 簿冊に綴られた各文書を翻刻したものである(図1)。
各文書の内容については、冒頭に目録が綴られており、紀要第16号(2016年発行)に掲載してある。本号には目録の文書番号二〇から二五までを掲載した。

各文書については、紀要に文書毎に分割して掲載している。なお、掲載の順序は、原則として「教育雑件」に綴られている順序とする。

翻刻は、浦幌町立博物館ボランティアの三浦直春が担当してきたが、三浦が2018年に逝去したため、帯広百年記念館学芸員の大和田努が引き継いだ。



図1 大正十五年 昭和元年 教育雑件(浦幌村役場)

※原資料は浦幌町立博物館で収蔵していますが、資料の劣化防止などのため、展示公開はしていません。調査・研究上の理由で必要な場合には、所定の手続きにより閲覧する事が可能です。原資料の閲覧が必要な場合は、博物館までお問合せ下さい。

〔浦幌町立博物館学芸員〕

投稿要領・執筆要領

浦幌町立博物館では、『浦幌町立博物館紀要』への投稿者を募っています。投稿範囲は、浦幌・十勝並びに北海道を含む北方圏に関する論文、短報、資料紹介、新産地情報、調査・観察記録などです。

投稿は随時受け付けておりますので、投稿希望の方は、当館へご連絡下さい。

投稿者への別刷りは、50部までは無料です。それ以上の印刷については著者負担とします。

なお、投稿原稿は紀要に掲載後、インターネット上で全文を公開します。投稿にあたっては、公衆送信権を含む著作権を当館に帰属して頂きます。

執筆にあたっては、以下の投稿要領・執筆要領を参照の上、原稿を作成ください。

1 投稿要領

<提出方法>

原稿は手書きまたはパソコンで受け付けます。投稿の際は、別紙に氏名・タイトル・連絡先を明記して下さい。

手書き原稿の場合は、縦書き・横書きのいずれも400字詰め原稿用紙を使用して下さい。

パソコン原稿の場合は、テキスト形式もしくはMS-Word形式で保存したデータを、打ち出し原稿と共に送付して下さい。

データでの提出は、USBメモリもしくはCD-Rで送付下さい。電子メールでの提出にあたっては、投稿用のメールアドレスを別途指示しますので、事前にご連絡ください（博物館の代表アドレスでは受け取れませんのでご注意ください。）

原稿は「紀要原稿在中」と赤書きの上、下記の浦幌町立博物館宛に提出ください。

〒089-5614

北海道十勝郡浦幌町字桜町16-1 浦幌町立博物館

電話：015-576-2009

2 執筆要領

<言語>

本文は和文に限ります。ただし、タイトル、氏名、所属には英語表記を御用意ください。また、英文アブストラクトを付ける事もできます。

学名、欧文用語および数字は半角文字で記し、句読点はそれぞれテン全角（、）および全角マル（。）とします。

<引用文献>

文献は、原則として本文中に引用した文献のみをとりあげ、和文、欧文を含めて著者名のアルファベット順に配列して下さい。

本文中での引用は（持田・加藤2001a; 持田2002）、持田ほか（2001）、(Mochida & Kato 1995, 2001b, c)、Mochida et al. (1997)を原則とします。なお、縦書きの場合は、原則として漢数字で表記下さい。

(例) 持田誠 (二〇一五 a)

下記の表記例を参考にして下さい。

a. 論文の場合は、著者名. 発行年. 表題. 掲載雑誌名 巻(号): ページ. と表記する。

(例) 上赤博文. 1995. 田手川の植物群落と植物相. 佐賀自然史研究 1(1): 5-16.

b. 単行本の場合は、著者名. 発行年. 書名. ページ数. 発行所, 発行地. と表記する。

(例) 伊藤秀三. 1994. 島の植物誌. 246pp. 講談社, 東京.

c. 単行本(分担執筆)の一部を引用する場合は、著者名. 発行年. 章名. 本の編者名, 書名. 章のページ. 発行所, 発行地. とする。

(例) 長田芳和. 1997. ニッポンバラタナゴ. 長田芳和・細谷和海(編), 日本の希少淡水魚の現状と系統保存一よみがえれ日本産淡水魚一. pp.76 - 85. 緑書房, 東京.

<脚注>

脚注は本文末にまとめて記述します。表記は(註1)の形式とします。本文中では下記のとおり表記して下さい。

(例) …と考えられている(註1)。

<図表と説明文>

図表番号は写真も含めて図1、表1とします。

図版、写真、表は、本文へ貼り付けず、1点ずつ別途お送り下さい。また、図版データはJPGで、表データはエクセルの形式で提出願います。

図は図表、図版とも完全原稿とし、余白または裏に著者名、番号、天地を明記して下さい。また、本文の打ち出し原稿の右余白に図の挿入位置を書き込んで下さい。ただし図版の説明文(キャプション)は図版にはめこまず、図表番号と説明文を別紙A4用紙に記入して下さい。図表の説明文には英文を併記することができます。

(2016年3月制定)

浦幌町立博物館紀要 第21号

ISSN 2189-4787

発行日 2021年3月31日

編集・発行 浦幌町立博物館
〒089-5614 北海道十勝郡浦幌町字桜町16番地1
電話 015-576-2009 FAX. 015-576-5834 (図書館)

印刷所 大同出版紙業株式会社
〒080-0017 北海道帯広市西7条南6丁目2番地
電話 0155-23-5107 FAX. 0155-23-9032